漁村高齢者活力促進事業

鹿児島県伝統漁具漁法集

網・釣 漁 業

平成３年３月

鹿　児　島　県

はじめに

この伝統漁具法集は，県下の沿岸で古くから操業されていた各種漁業の変遷等について，水産業改良普及員が調査した結果をとりまとめたものです。

先人が導入，研究，開発した漁具，漁法を記録として残すとともに，その一端に触れ今後の漁船漁業の改良，普及の参考になれば幸いです。

なお，掲載した伝統漁法のほかに，餌木によるミズイカ（アオリイカ）釣や種子島におけるマンガ（万鍬）によるヒラクサ漁業等多くの伝統漁法が未掲載で，今後も補完，改訂が必要であると考えています。

最後に，調査やとりまとめにあたり，御協力をいただきました多くの方々に対し厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

鹿児島県水産振興課長　　目　原　克　彦

目　　次

〔網　漁　業〕

1. ケガサ（貝桁網漁業）　喜入町漁協 …… 3
2. 打瀬網（桁打瀬網漁業）　出水市漁協 …… 7
3. ボラ網（ボラ敷網漁業）　野間池漁協 …… 11
4. 八田（八田網漁業）　志布志漁協 …… 14
5. 時期トビ網（ビドウオ浮敷網漁業）　上屋久町漁協 …… 19
6. 待網（小型定置網漁業）　瀬戸内漁協 …… 24

〔釣　漁　業〕

7. 飼付け（ブリ飼付漁業）　野間池漁協 …… 28
8. ドンベ釣（フエワキダイ一本釣漁業）　野間池漁協 …… 31
9. エソ釣（エソ一本釣漁業）　串木野市島平漁協 …… 32
10. タイかぶし釣（タイ・ハンカチ釣漁業）　阿久根市漁協 …… 34
11. タコひっかけ（タコ釣漁業）　長島町漁協 …… 37
12. はね釣（サバはね釣漁業）　上屋久町漁協 …… 39
13. タチ曳釣（タチウオ曳釣漁業）　錦江漁協 …… 42
14. メチカ曳縄（ソーダガツオ曳縄漁業）　笠沙町漁協 …… 45
15. 秋太郎縄（バショウカジキ延縄漁業）　江口漁協 …… 47
16. 銀縄（オキエソ延縄漁業）　串木野市島平漁協 …… 49
17. ダント縄（アマダイ・キダイ延縄漁業）　串木野市島平漁協 …… 51
18. アラカツ縄（カサゴ延縄漁業）　黒之浜漁協 …… 53
19. ハモ縄（ハモ延縄漁業）　東町漁協 …… 55

〔その他漁業〕

20. キダカテゴ（ウツボ籠漁業）　佐多岬漁協 …… 57
21. イカ籠（甲イカ籠漁業）　吹上町漁協 …… 60
22. ずべいつり　（素潜り釣漁業）　野間池漁協 …… 64
23. 突ん棒（オキサワラほこ突漁業）　屋久町漁協 …… 66
24. ソーラ突（　同　上　）　住用村漁協 …… 69

ケガサ　（貝桁網漁業）

1. 調　査　地　：　揖宿郡喜入町喜入（喜入町漁協）

2. 沿　　岸

ケガサは，バカガイを漁獲するため喜入地区で古くから使われている漁具で１００年を越える歴史がある。戦前，戦後もバカガイ資源の増減に伴い操業がくりかえされてきた。当地区の漁業は古くはこのバカガイ漁業が主幹漁業であり，漁業と言えばケガサと言っても過言ではない程であった。

最近では，昭和５４年にもバカガイが発生したもののケガサで操業する程の量ではなく，昭和３５～３６年の異常発生時がケガサによる最後の操業であり，当時は使用漁船も櫓漕ぎの１トン未満の木船で，近隣の漁協を合わせると１００隻を越える船が出漁したようである。

3. 漁　　法

- ○　早暁から操業開始
- ○　操業終了は漁獲状況により取決めていた。
- ○　まずアンカーを入れ，アンカーロープ５０ｍ，まき網５０ｍを投入後桁網を投入。桁網投入後まき網５０ｍを足でドラムを廻して木樽まで巻いて桁を曳く。
- ○　大量に入網した場合（曳始めて大量に入網すると桁網が浮いて軽くなる）同じポイントで何回も操業する。
- ○　１回の操業に５～２０分間を要する。
- ○　１日の操業回数　１０～２０回

4. 漁　　期　：　１２月～４月　（盛期：１月～３月）

5. 漁　　場

(1)　水深：５ｍ～１０ｍ（７ｍ～８ｍが主体）

(2)　底質：砂地（荒砂）

6. 漁船規模及び乗組員

１トン未満の櫓漕船

２　　名

7. 餌　　：　ー

8. 主な漁獲物　：　バカガイ（多い時は４００kg／日，隻位の漁獲）

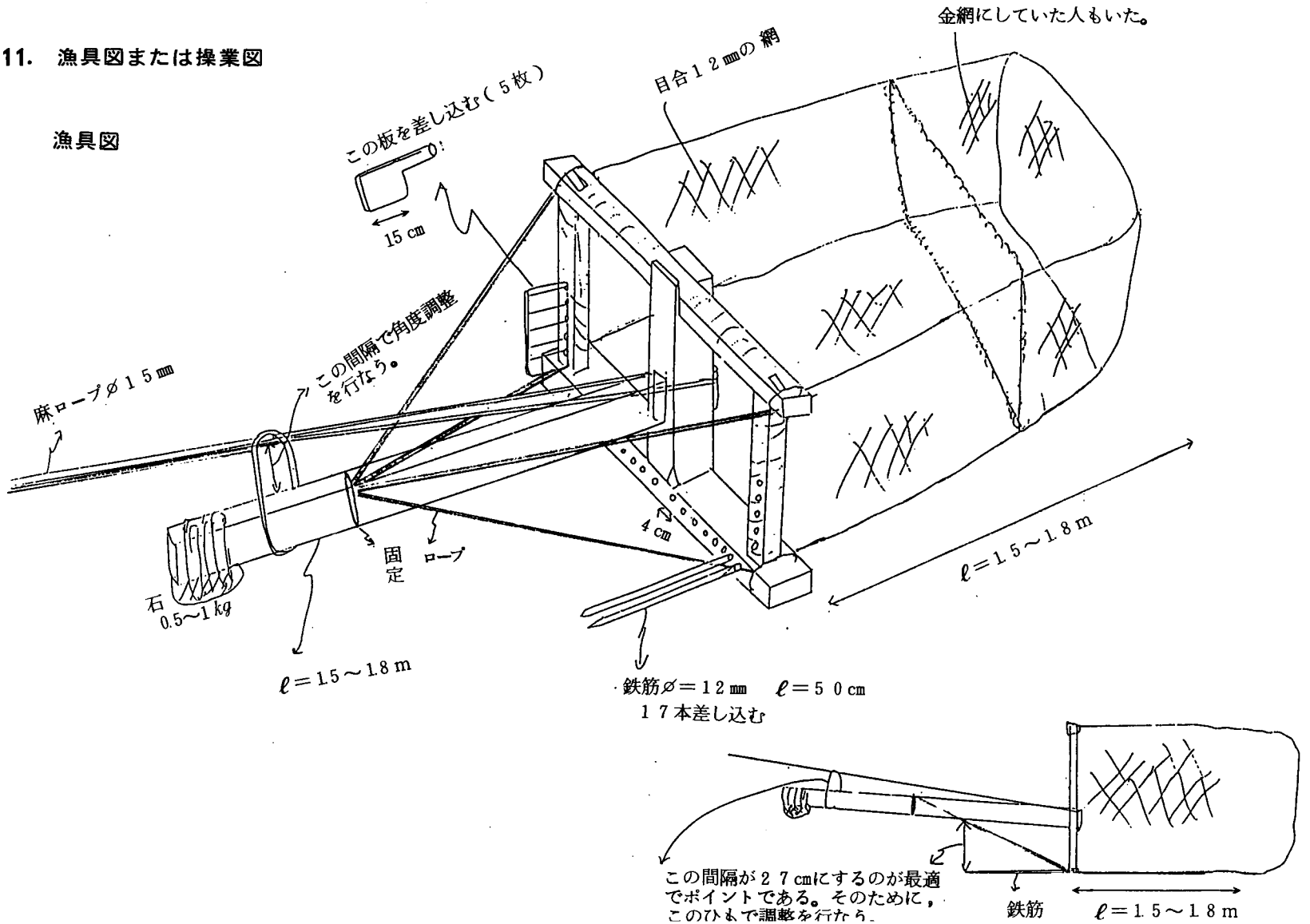
9. 漁獲物の処理　：　鮮魚

10. 漁具構成

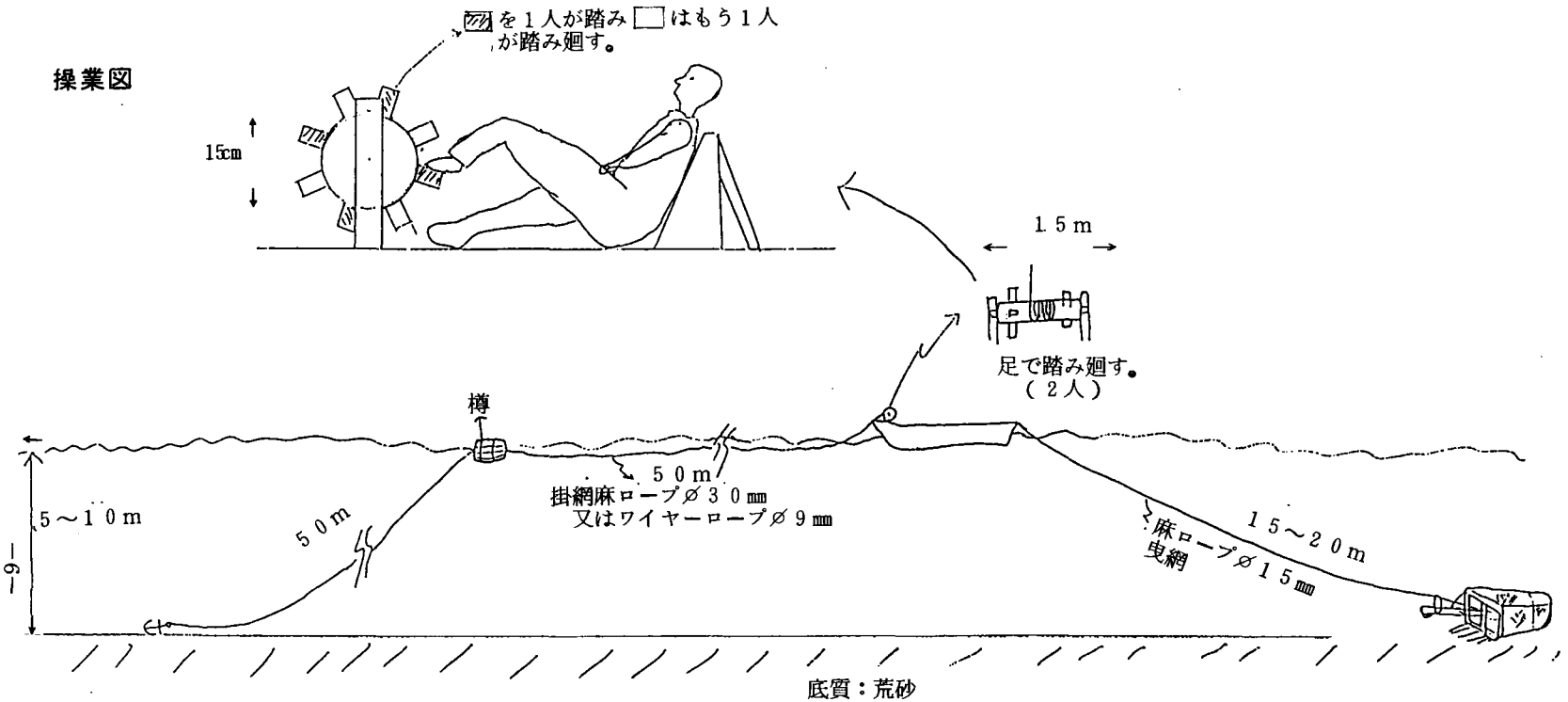
名　　称	材　質　・　規　格
桁	木製
つ　　め	鉄筋⌀１２㎜　　ℓ＝５０cm
袋　　網	目合１２㎜の網と金網
曳　　網	麻ロープ　⌀１５㎜　　ℓ＝１５～２０m
ま　き　網	麻ロープ　⌀３０㎜　ℓ＝５０m（３０年代にはワイヤーロープを使用する船もいた）

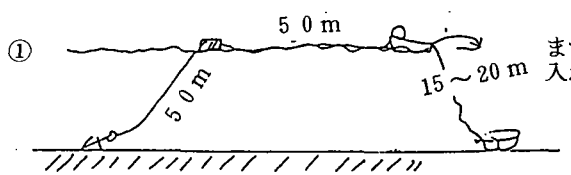
11. 漁具図または操業図

漁具図

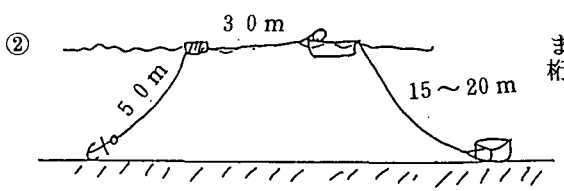


操業図

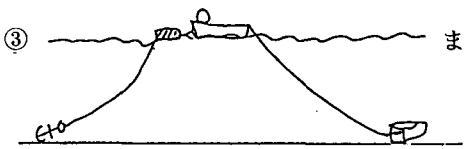




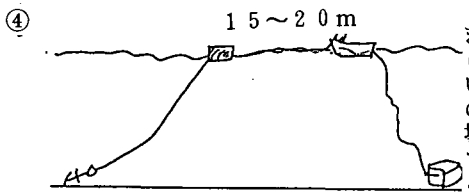
まずアンカーを入れ，次にまき網を入れ，桁をほうりなげる。



まき網を１５～２０ｍ巻いた時点で桁網を曳き始めることになる。



まき網をまき終えた時点



まき網を１５～２０ｍ伸ばし桁の真上位に船を持っていき，桁を船上へ上げ，③の段階で大量の漁獲がある場合は桁が浮いて軽くなっているので手で曳いて揚げる時もある。

打瀬網（桁打瀬網漁業）

1. 調　査　地　：　出水市名護（出水市漁協）

2. 沿　　革

現在は桁打瀬網漁業として操業しているが，以前は桁を付けずに無動力船で打瀬網として操業していた。その後昭和３０年前後より網口に木製の桁をつけた桁打瀬網が始まり，しばらくはそれらが共存していたが，やがてすべて桁打瀬網となった。また，昭和３４年頃より動力化が進み，漁場の往復等，効率化が図られ，桁も鋼製となり漁具の改良も進んだ。当初は周年操業できたが刺網との競合等，資源上，調整上の問題が持ち上がり，昭和５１年頃に漁期を１０月１５日～２月末日と定めた。操業統数は，昭和２０年代半ばまでは打瀬網として１４０統余りあったが，その後減り続け，現在では１８統となっている。

3. 漁　　法

(1)　出港時刻　　午前6時前後

(2)　帰港時刻　　午後1時～3時頃

(3)　投網回数　　2回

(4)　一回当りの曳網時間　　2.5時間

(5)　操業方法

午前6時前後（日の出時刻により変わる）に名護港を出港し，エンジンをかけて漁業の風上に到着する。帆を張って，元網の長い順にマストの桁網，出し棹の桁網，船側の桁網を船を流しながら投網する。曳網は，エンジンをとめて2.5時間程行う。揚網は投網の逆の順に行い，エンジンをかけて再度漁場の風上に向かい，2回目の操業を行なう。揚網から2回目の操業を始めるまで1時間程かかる。帰港時刻は漁場や風等によって午後1時～3時頃になる。

4. 漁　　期　：　１０月１５日～２月末日（盛期：１１月～１月）

5. 漁　　場

(1)　水深：２５ｍ～４０ｍ（漁期始めは岸寄りの浅場で，次第に沖の深場へ移る）

(3)　底質：　砂

6. 漁船規模及び乗組員

4.トン～7.8トン

1名～2名（1人乗りが多い）

7. 餌： ー

8. 主な漁獲物 ： エビ類（クマエビ，クルマエビ，キエビ）シャコ，カニ類（イシガニ，ガザミ等）ユウイカ，魚類（ガンゾウヒラメ，シバガレイ，ウシノシタ，コチ類）

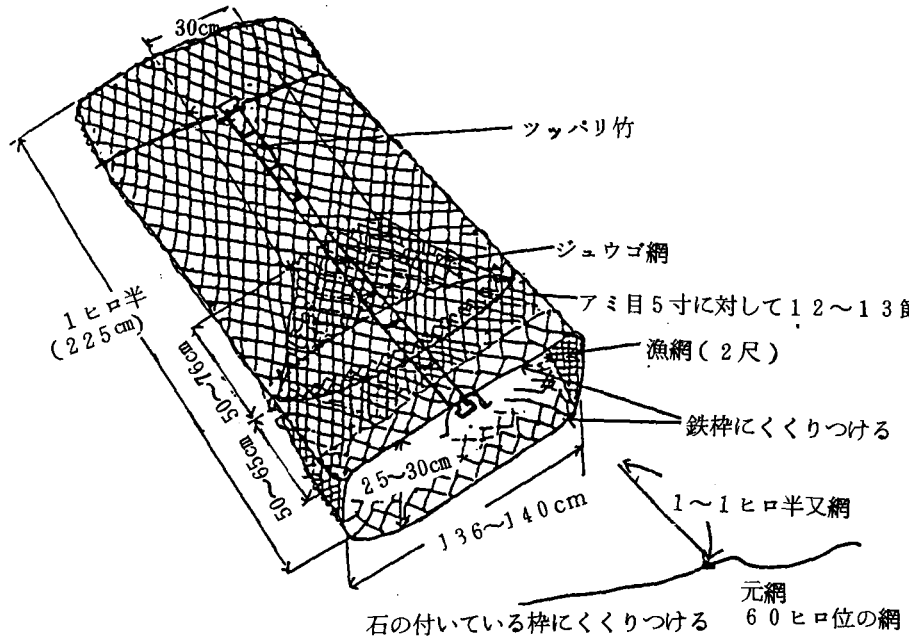
9. 漁獲物の処理： エビ類，カニ類，コチ類は船倉等に活かし，翌日活魚で出荷，イカ類，魚類は冷蔵して翌日鮮魚で出荷

10. 漁具構成

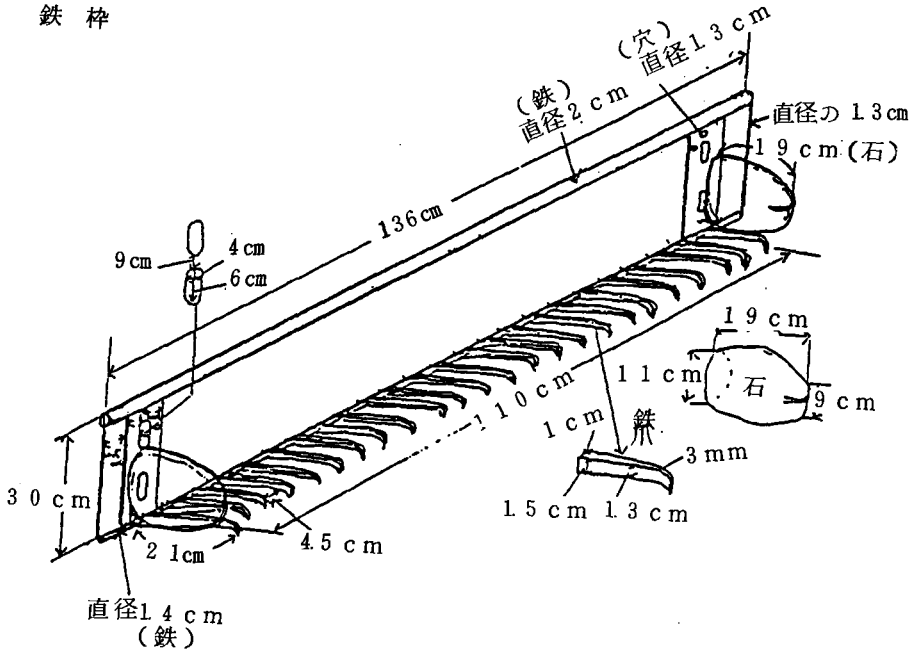
名　称	材　質	規格・寸法	数　量	備考
桁網				
桁　枠	鉄	136×30cm（ツメ20cm）	約10組	
桁網石	石	2個（重さは元網の長さによって異なる）	漁船規模に	
網	ポリ網	136×30×225cm(11～14節)	よって増減す	
ツッパリ竹	竹	3×130cm	る。	
マスト	ひのき	7-8-9mまたは5-7-8-9-6m	3～5本	
出し棹	ひのき	おもて　8m，とも　9m（5本マストは使わない）	2本	
帆				
帆　布	ビニロン		5～7枚	
帆ツッパリ竹	竹	直径5～10cm×帆巾	5~8本×2帆分	
帆もたせ竹	竹	直径10～15cm×4m	2~3本×2組	
ロープ	ポリロープ	9mm他（もと綱，は綱，してん張り等）		
滑　車	木，プラ滑車		20～25	
ローラー		巻き上げ用	1～2基	

11. 漁具図または操業図

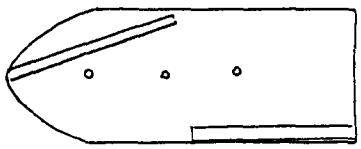
桁　網

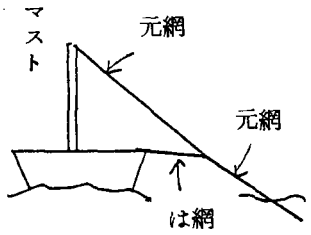


鉄　枠

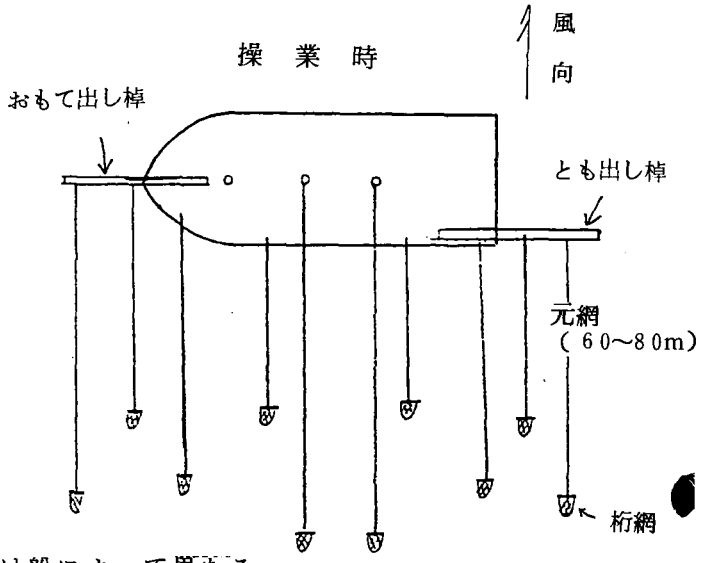


出　帰　港　時



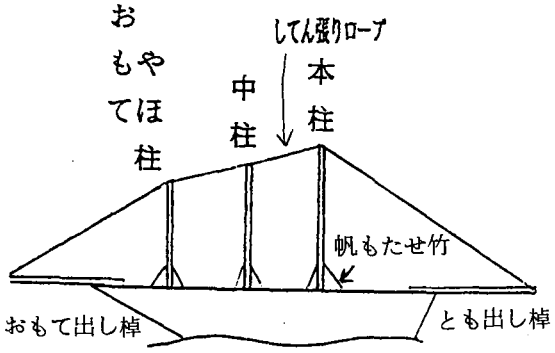


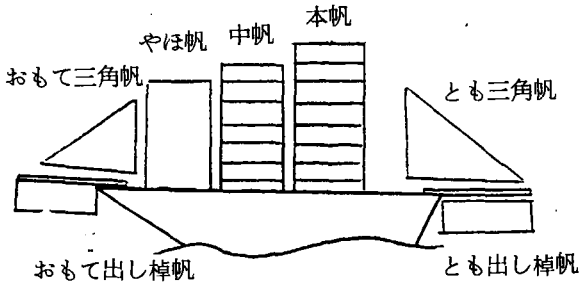
操　業　時



桁数や元網の取り方，長さは船によって異なる。

五本マストの場合は出し棹は使わず，後4本のマストからもと網を取る。





帆は風の強さ等で適宜縮帆する

おもてやほ柱	7 m
中　　柱	8 m
本　　柱	9 m
おもて出し棹	8 m（先に4 m出す）
とも出し棹	9 m（後に5 m出す）

ただし船によって異なる。

やほ帆	3 × 6 m
中帆　（つっぱり竹付）	4 × 8 m
本帆　（つっぱり竹付）	4 × 9 m
おもて出し棹帆	4 × 2 m
とも出し棹帆	5 × 2 m
おもて三角帆	3 × 3 m
とも三角帆	4 × 4 m

ただし帆の大きさは概略
船によって異なる。

参考文献（永井富夫　不知火海の風物 1990）

ボラ網（ボラ敷網漁業）

1. 調査地： 川辺郡笠沙町片浦（野間池漁協　森　　猛）

2. 沿　　革

明治頃から始まり，昭和２０年頃まで続いた漁業で，例年土用入りの１週間前の１０月中頃から１１月１０日前後にかけ，大群をなして廻遊するボラの卵巣（カラスミ）を目的とするもので，現在は操業されていない。

経営は網元が行い乗組員は地区別に分けられていた。山手の農家の人達も出てきたが，人が多く船には乗れない状態で配当だけはやった時期もある。

このような網元が６経営体あった。ボラが通る漁場は６ケ所あり毎日交替して操業していた。昼間１日１回操業で，多い時は数万尾の漁獲があり，ボラが網の下方に逃げようとして網が下に沈むので，木灰を撒てボラを早く弱らせて揚げていた。浜には魚が山積みにされて処理され，塩漬けにした卵巣は地元で入札され，長崎，熊本の業者が買い取っていった。

3. 漁　　法

昼間操業で，時期になると見張番（山見）が山に立ち，ボラの群を見張った。ボラの大群を確認すると山見はグミの木（葉が白い）で合図を送った。この合図によりボラの通り道に網を仕掛け，魚群が網に乗った時，人力で網を引揚げ漁獲した。

4. 漁　　期： １０月～１１月（盛期：１０月末～１１月３日）

5. 漁　　場　　野間池地先

(1) 水深：１０ｍ前後

(2) 底質：砂混じり岩

6. 漁船規模及び乗組員

３０尺～４０尺和船４隻，伝馬船

１隻当り１０名～２０名，１組当り５０名～６０名

7. 餌　：　ー

8. 主な漁獲物　：　ボラ（卵巣）

9. 漁獲物の処理　：　解体後卵巣を塩漬け

10. 漁具構成

網地：３０～４０本撚り，５節１００間×１５０間

麻→綿糸→クレモナへと変化した。

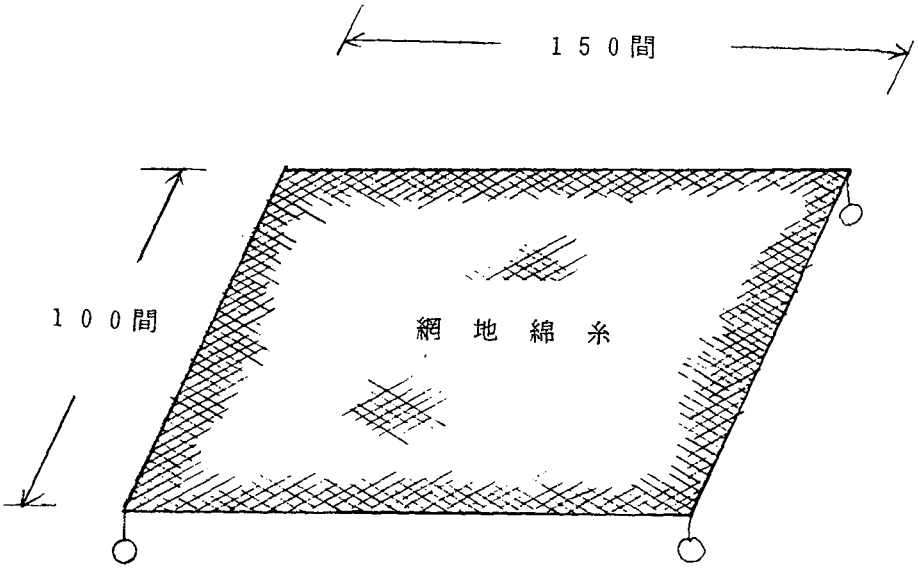
曳網：５分　１隻毎に３本の計１２本

浮子：なし

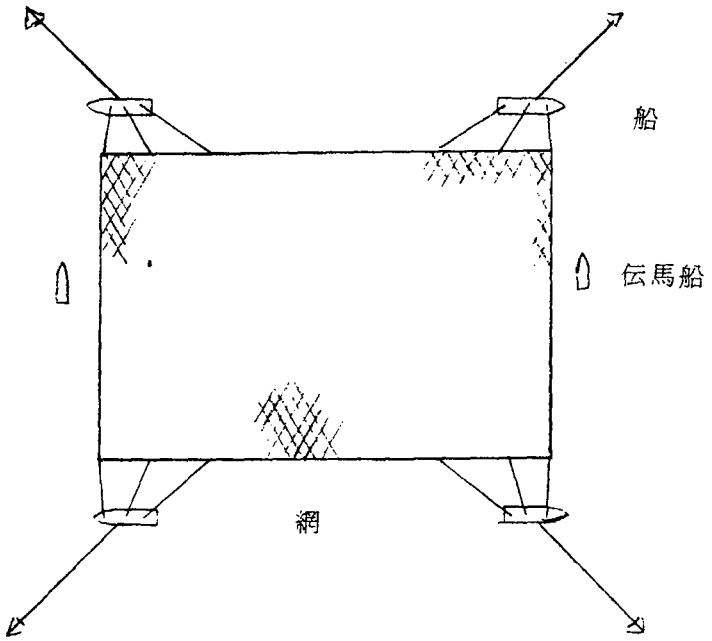
沈子：網の４隅にそれぞれ３～４kgの石を付けた。

11. 漁具図または操業図

漁具図



操業図



八　田　（八田網漁業）

1. 調　査　地　：　曽於郡志布志町帖（志布志漁協）

2. 沿　　革

志布志地区の発展に寄与した八田網漁業の始まりは，１８世紀頃と言われている。主に資力を持った回船業者等が営み，志布志の賑わいは，「八田網の取れ具合」とまで言われた。

終戦直後の盛んな時期には，志布志地区で１０統が操業され，約３５０人が従事し，志布志湾一面に漁火がともり息をのむような景観を呈したと言われている。

しかし，２００年以上続いたこの漁業も，昭和３０年代になると，小型底曳に転向するものが増え，多人数を必要とする八田網は，不漁と人手不足をもって衰退の道をたどり，昭和４７年，最後の２統が操業を止めたことでその歴史を閉じた。

八田網は，大船・網船各１隻，つま船２隻，火船４隻の合計８隻の漁船を使用し，約３０人の乗組員を要した。（１図）

大船には一統の総責任者である大船船頭以下７～８名が乗り組んだ。

また，火船は通常１人乗りで，出漁の決定，漁場の選定等をする責任者が乗り込んだ船は，特に「大将火船」と呼ばれた。

火船の光源は，時代と共にかがり火，カーバイトによるガス灯，バッテリーによる電灯，水中灯へと進歩していった。

3. 漁　　法

(1)　午後３時頃港を出港

(2)　漁場についたら，大将火船が山当てにより網代の位置を定め，図１のように船を配置する。

(3)　火船は，日没を待って漁火をつけ，魚が火についたら大船に合図をおくる。

(4)　合図を受けた大船の船頭は，先端に２００ｇくらいの石を付けた「潮見なわ」を海中に入れ，潮の流れを探り，潮上から網を敷設する。（図３）

(5) 網の敷設を確認した各火船は，錨浮きから離れ漁火に集まった魚が逃げないように，ゆっくり櫓を漕いで網の中心へ移動する。

(6) 網の中心部へ移動した4隻の火船は，大将火船だけが「なかうけ」にとりつき，他の船は漁火を消してもとの錨浮きのところへ帰る。

この浮きは，波の動きで音が出るように工夫してあり，「ないこ」と呼ばれ，火船はこの音を頼りに帰っていく。

(7) 大船の船頭は，この時点で網揚げの合図をおくり，各船は一斉に揚網を開始する。

操業は，1晩に3回が普通で，その日の漁により漁場を移動することもあった。

昭和40年代は，装備の近代化，省力化，人手不足等により火船を2隻に減らし，網船以外の船も火を灯し火船の代わりをするようになった。

このときは，各船が集めた魚を大将火船が集めてまわり，魚を大将火船に渡した大船，つま船は，網船のところに移動し網を敷設していた。

4. 漁　　期 ： カタクチイワシ：11月～3月
アジ，サバ：4月～10月

5. 漁　　場 ： 志布志湾内が主体（約30箇所の網代）

(1) 水深：50m以浅

(2) 底質：周囲に岩礁のある砂地
アジ網（夏場）は都井岬沖，岸良沖へも出漁した。
くじ引きで操業する網代の順番を決めた。

6. 漁船規模及び乗組員

トン　大船（長さ8尋）1隻：7～8名
名　　網船（長さ7尋半）1隻：7名
つま船（長さ5尋）2隻：5名／隻
火船（長さ2尋半）4隻：1名／隻
8隻：30名

7. 餌 ： ー

8. 主な漁獲物　：　カタクチイワシ，アジ，サバ

9. 漁獲物の処理　：　鮮魚

10. 漁具構成

網は，７５間×２０間程度のものを使用し，「おこしの」と呼ばれる引き網（６分）が，１辺当たり３～４本付いていた。

図２　八田網配置図

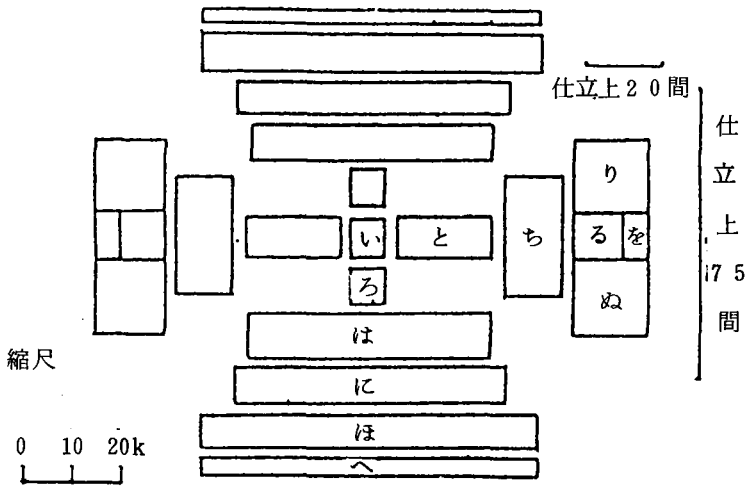


表１　網地構成所要材料表

総所要量　2,172尋

符号	材料大さ	目合	掛目	長さ	反数	符号	材料大さ	目合	掛目	長さ	反数
い	綿糸15本	10節	100掛目	10 k	4反×1	と	綿糸18本	10節	100目	12k	12反×2
ろ	〃 9〃	10 〃	〃	12 〃	4×2	ち	〃 12〃	6 〃	〃	32〃	4 ×2
は	〃 9〃	8 〃	〃	10 〃	20×2	り	〃 13〃	4 〃	〃	20〃	3 ×2
に	〃 12〃	6 〃	〃	10 〃	18×2	ぬ	〃 15〃	4 〃	〃	20〃	3 ×2
ほ	〃 15〃	4 〃	〃	10 〃	14×2	る	〃 15〃	4 〃	〃	12〃	2 ×2
へ	〃 15〃	4寸目	〃	5 〃	19×2	を	〃 15〃	4 〃	〃	8〃	3 ×2

11. 漁具図または操業図

図１　八田網漁船配置図

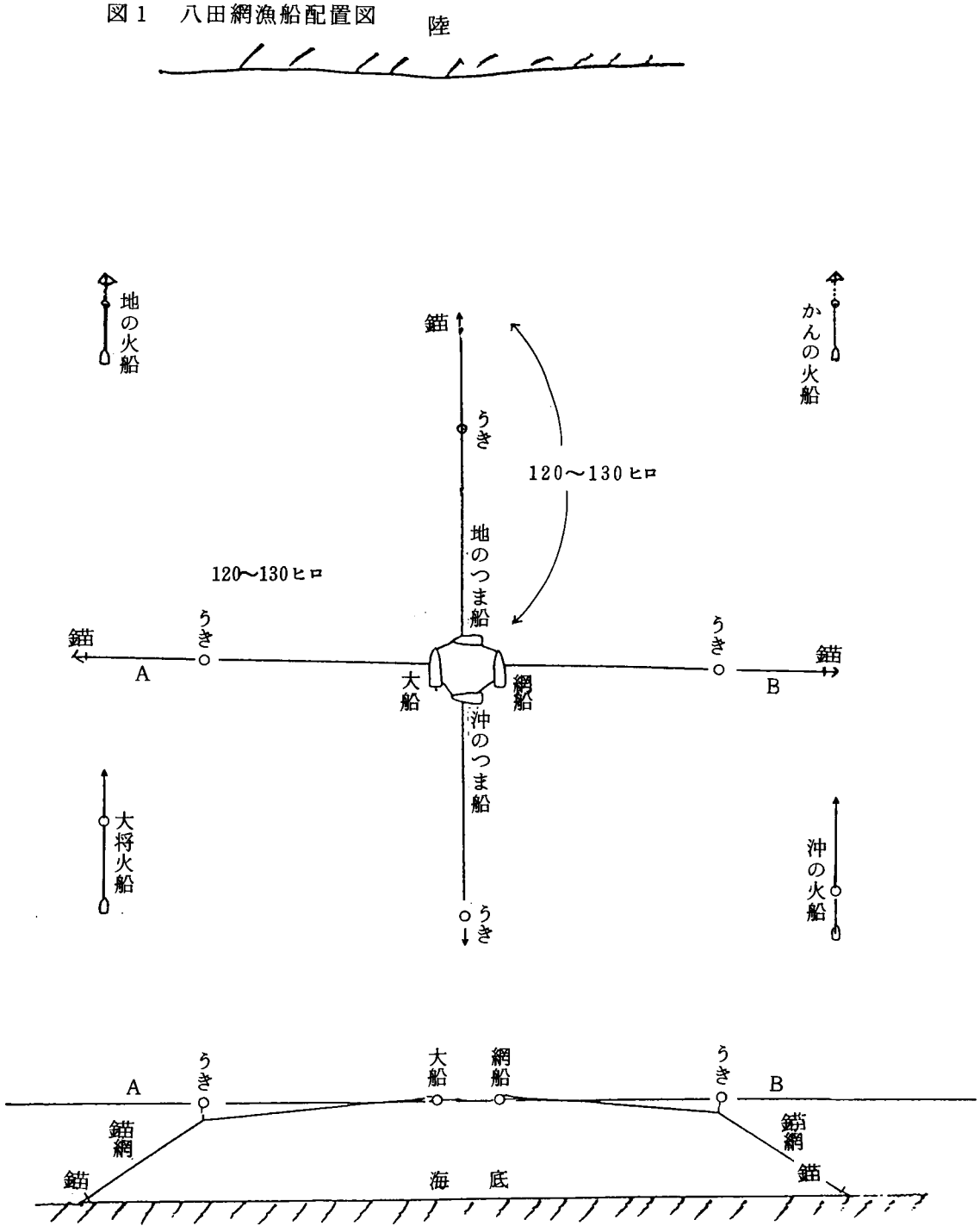
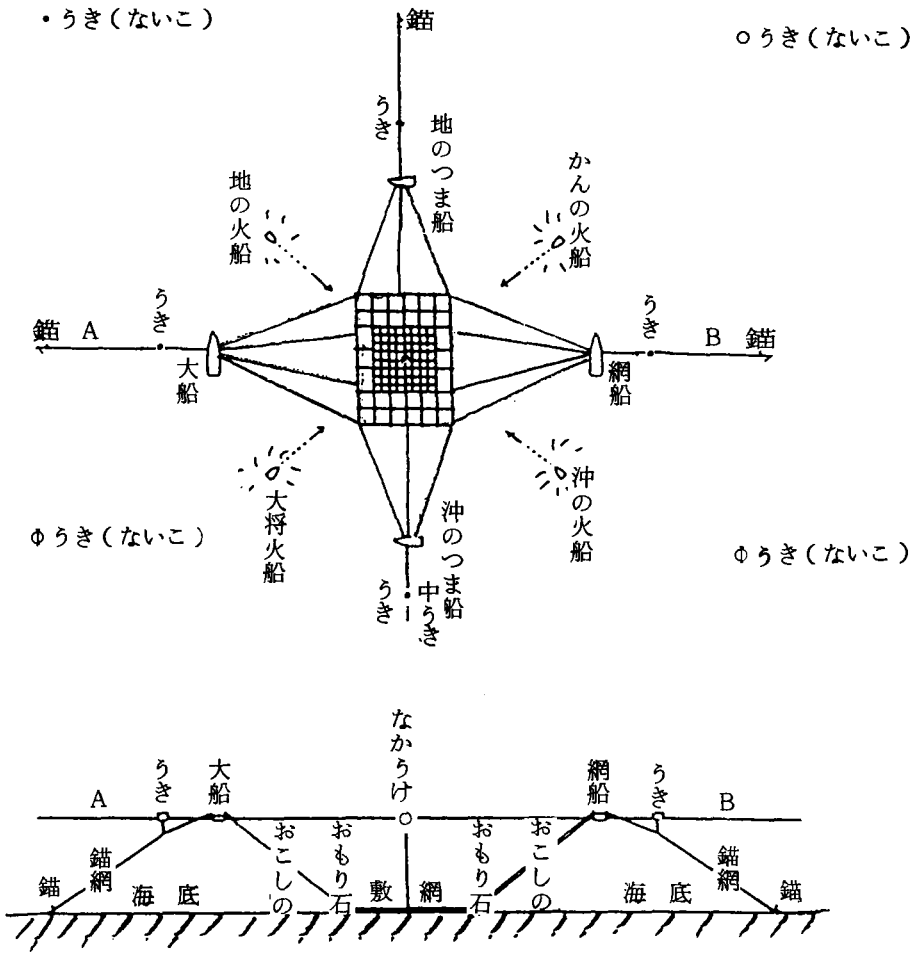


図３　八田網敷設図



参考文献

「八田網漁の沿革と周辺」　志布志町教育委員会　昭和６３年３月
「鹿児島県主要漁具図譜」　鹿児島県水産課　昭和２８年１１月

時期トビ網（トビウオ浮敷網漁業）

1. 調 査 地 ： 熊毛郡上屋久町宮之浦（上屋久町漁協　笠井久　みゆき丸）

2. 沿　　革

トビウオ漁業の歴史は古く，藩政時代から行われていた。明治になって，小型の浮敷網（平網）が使用されるようになり，天草方面からの出漁者も多く，当時の操業は無動力船２隻網１張，乗組員１０～１２名，うち半数は女性であった。

明治２０年頃天草の漁民が平網を改良して現在の袖網のある箕状の網となり，これが普及していった。やがて昭和初期からは発動機が用いられるようになった。

漁場は明治４０年頃までは，宮之浦や一湊であったが次第に栗生，中間に移動してきた。終戦後も屋久島南部に移動していた主漁場は年ごとに位置を替え，移動が激しいので魚見船が重要な役割を担っていた。

操業統数は，昭和２５年に１５０統あったものが減少し３２年には８１統，５０年代前半になるとトビウオの接岸も見られなくなり現在では全く行われていない。

3. 漁　　法

(1) 操業時刻　　午前４時頃～午前８時頃

(2) その他

産卵のため接岸したトビウオを２隻の漁船で囲網を曳航して袋中にみちびき漁獲するものである。

まず魚見船が晩９時頃出港し，魚群を探していく魚群は海面で判断する。

１２時までには，その日の漁場を決定し，トランシーバーで連絡する。網船は２隻で１統，１隻に５～６名ずつ乗込み１時頃出港する。４時頃から投網し，概ね岸へ向け展開する。又，網の内側には潜み手２～３名が入り，トビウオば産卵を終えて沖合へ逃げる時，合図をし，揚網する。

揚網は，沈子方ロープを船内に引き揚げながら，浮子方ロープも同時に引きあげ，最終的に両船の間の袋部に集まった魚群をタモで抄いあげ船内に取り入れる。

この１回の操業に４０分程かかり，１朝に３～４回操業をくり返す。

4. 漁　　期　：　５月～６月

5. 漁　　場

(1)　水深：５ｍ～４０ｍ

(2)　漁場の選定：魚見船（目視）

6. 漁船規模及び乗組員

２.５トン～３トン　　２隻

１隻当り　　５名～６名

7. 餌　：　ー

8. 主な漁獲物　：　ツクシトビウオ

9. 漁獲物の処理　：　鮮魚

10. 漁具構成

(1)　重要寸法　　仕立上　浮子方　６０ｍ　沈子方　３９ｍ

(2)　漁具の性状

一嚢両袖を有する敷網で浮子は水面に浮上し，沈子は水底に密着しない。

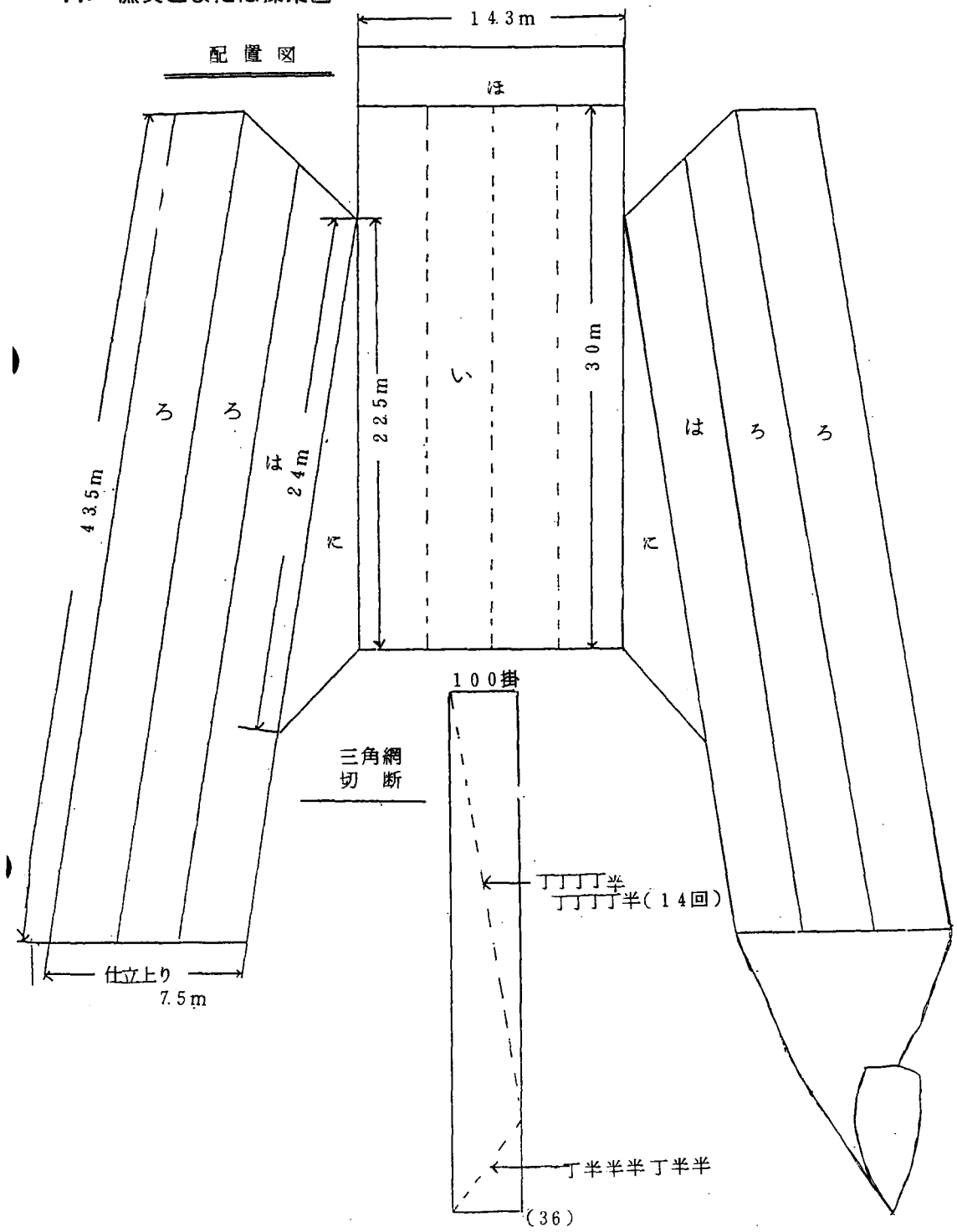
(3)　漁具一統分構成

◎　網地の部

名称	材料	大さ	目合	掛目	長さ	反数	総長	符号
袋網	アミラン	１２本	9.2節	100掛	２９ｍ	4 反	116ｍ	い
袖網	〃	〃	〃	100掛	４４〃	4 〃	176〃	ろ
〃	〃	〃	〃	100掛	２９〃	2 〃	58〃	は
三角網	〃	〃	〃	100掛	２４〃	1 〃	24〃	に
袋尻網	〃	〃	9.5節	100掛	１４〃	1 〃	14〃	ほ

名称	材料	大さ	長さ	数量	所要量	備考	符号
浮子ロープ	ポリエチレン	１２㎜	６２ｍ	１条	６２ｍ		
浮子添ロープ	〃	６〃	６２〃	１〃	６２〃		
沈子ロープ	〃	９〃	４１〃	１〃	４１〃		
沈子添ロープ	〃	６〃	４１〃	１〃	４１〃		
目通糸	スパンナイロン	６０本	６５〃	１〃	６５〃	浮子方	
〃	〃	６０〃	４２〃	１〃	４２〃	沈子方	
浮子	合成	５号			５０コ		
沈子	陶器				２３コ		
仕立糸	スパンナイロン	１８本					
〃	〃	２４〃					
〃	〃	１２〃					
〃	〃	１８〃					

11. 漁具図または操業図



◎浮子方とりつけ

ア　網地縮結（片袖）

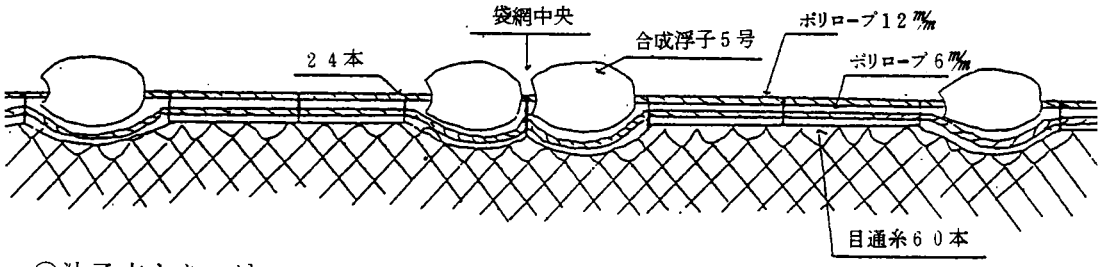
	中央部										袖口	
網　地	5.7m	6 m	6 m	5.4m	5.4m	5.4m	4.5m	4.2m	3.6m	2.1m	2.1m	52.4m
浮子ロープ	3 m	3 m	3 m	3 m	3 m	3 m	3 m	3 m	3 m	1.5m	1.5m	30 m

イ　合成浮子とりつけ

浮　子	5コ	10コ	10コ	10コ	10コ	4コ
間　隔	15.5cm	24cm	30cm	36cm	45cm	98cm

袋部中央
1個増

ウ　浮子方とりつけ図



◎沈子方とりつけ

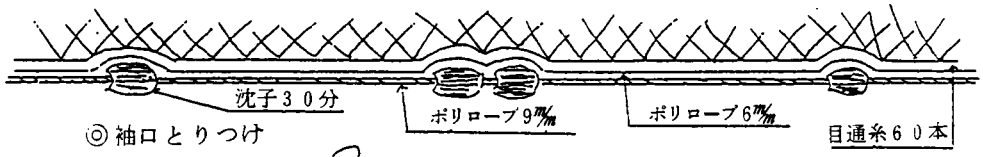
ア　網地縮結

網　地	39m	39m	36m	36m	36m	1.8m	221.8m
ロープ	3m	3m	3m	3m	3m	1m	19m

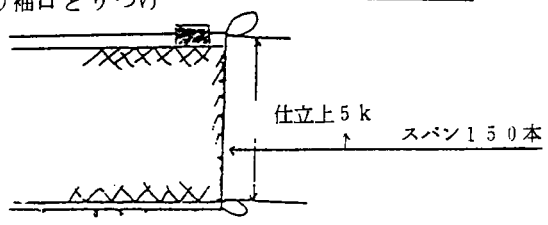
イ　沈子とりつけ

沈　子	8コ	5コ	5コ	5コ	23コ
ロープ	1m	1.5m	2.1m	2.4m	38.5m

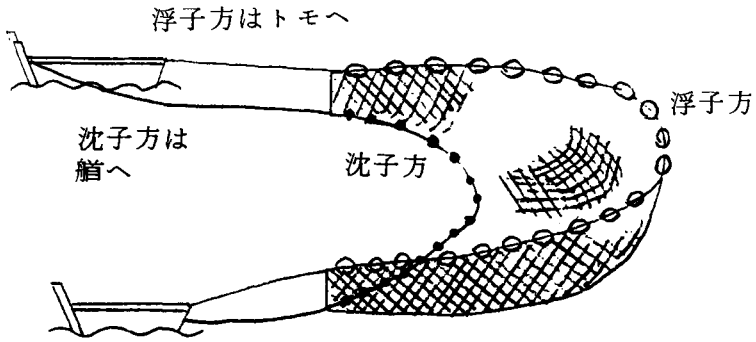
ウ　沈子方とりつけ

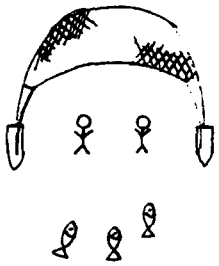


◎袖口とりつけ



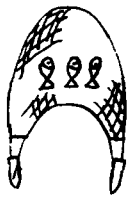
操　業　図



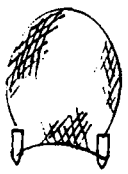


1. 網展開

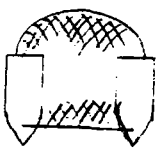
魚群産卵後沖へ



2. 魚群入網後
沈子方を引き上げる



3. 沈子方，浮子方を
引き上げる，網をしぼる



4. 両船間の袋部から
魚をとりげる

待網（小型定置網漁業）

1. 調　査　地　：　大島郡瀬戸内町古仁屋トンキャン（瀬戸内漁協）

2. 沿　　革

待網は，明治時代から当地で営まれるようになったもので，法的には「漁具を水中に一定期間敷設する」ため共同漁業権漁業（第2種）としての小型定置網に該当するが，〝昇網〟や〝落網〟を有しない原始的な構造で定置網というよりもむしろ，河川湖沼等で行われるエリ漁業に近い。

また，垣網は，刺網の機能も兼ね備えた特殊なものである。

現在，瀬戸内漁協では大島海峡内で21統の小型定置網が営まれているが，そのうち18統が当該〝待網〟で，残り3統は，ます網，つぼ網である。また，当地は冬期の季節風（北西風）が強く，この季節風を避けるため漁場を1経営体で4～5統持たなければ経営が成り立たない。なお，最近では，真珠（母貝）・魚類養殖業が盛んになったことにより，魚道が変わるとともに網の汚れ方がひどくなり，魚類の回遊量が減少しつつあるため当該漁業は衰退しつつある。

3. 漁　　法

満ち潮にのって魚が回遊して来るのを陸上の網小屋で待ち，魚群が身網に入ったら漁船を走らせ，身網の口の部分をロープで縛り，魚群が逸散するのを防ぐ。この際，垣網の方から身網に近寄らないとこの網は，昇網や落網を持たないため魚群が逸散してしまう。そして，身網の浮子・沈子の両方をたぐりながら身網を絞り，ある程度身網を絞ったら身網の一部（三角網）に袋状の網をつなぎ，魚群を移動させてこの網を1人で船上に引き揚げて漁獲する。また，身網の揚網中に，垣網にある程度魚が刺さったり，絡まったりするので垣網自体を船上に引き揚げて漁獲する。

網換えは，7～10日毎に身網の部分だけ行い，陸上で2～3日干して網の修理等を行うが，この間，替え網は入れない。また，身網だけは魚種によって3.5節と4節の網を使いわけ，台風時期には，垣網と身網の両方揚げる。

漁獲された魚類は，ほとんど漁協に水揚げされるが，一部の低価格の魚類は浜売りされる。

4. 漁　　期 ： 周年

5. 漁　　場

(1) 水深：１５ｍ（身網最深部）

(2) 底質：瀬（サンゴ礁）混り砂

6. 漁船規模及び乗組員

0.９５トン　（長さ６ｍのサバニ）

１　名

7. 餌 ： ー

8. 主な漁獲物 ： ムロアジ，メアジ，シマアジ，スマ，カツオ，カンパチ，ダツ，ブダイ

9. 漁獲物の処理 ： 鮮魚

10. 漁具構成

(1) 垣網の構成

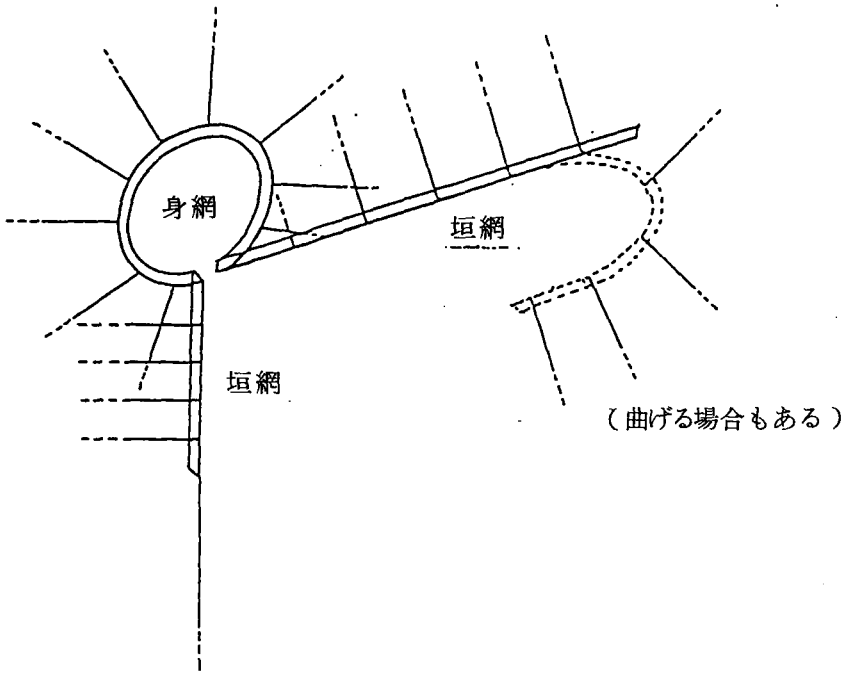
部　位	材　料　・　規　格	数　量　・　目　合　い
垣　綱	クレモナ7㎜（浮子綱・沈子綱）	２０～３０ｍ×２本，６０～１００ｍ×２本
垣　網	ポリ網（１８本，２１本）	４節・１８本，３.５～４節・２１本
碇ロープ	クレモナ８㎜	約２０ｍ／１ケ所（夏～10ｍ間隔，冬～5ｍ間隔）
碇	サンドバッグ２コ／碇ロープ１本	約３０コ（夏～１０ｍ間隔，冬～5ｍ間隔）
垣浮子	100㎜×30㎜，プラスチック製浮子	１コ／４０cm（Ｙ－１６Ｌ）
垣沈子	鉛２０匁	１コ／３０cm

(2) 身網の構成

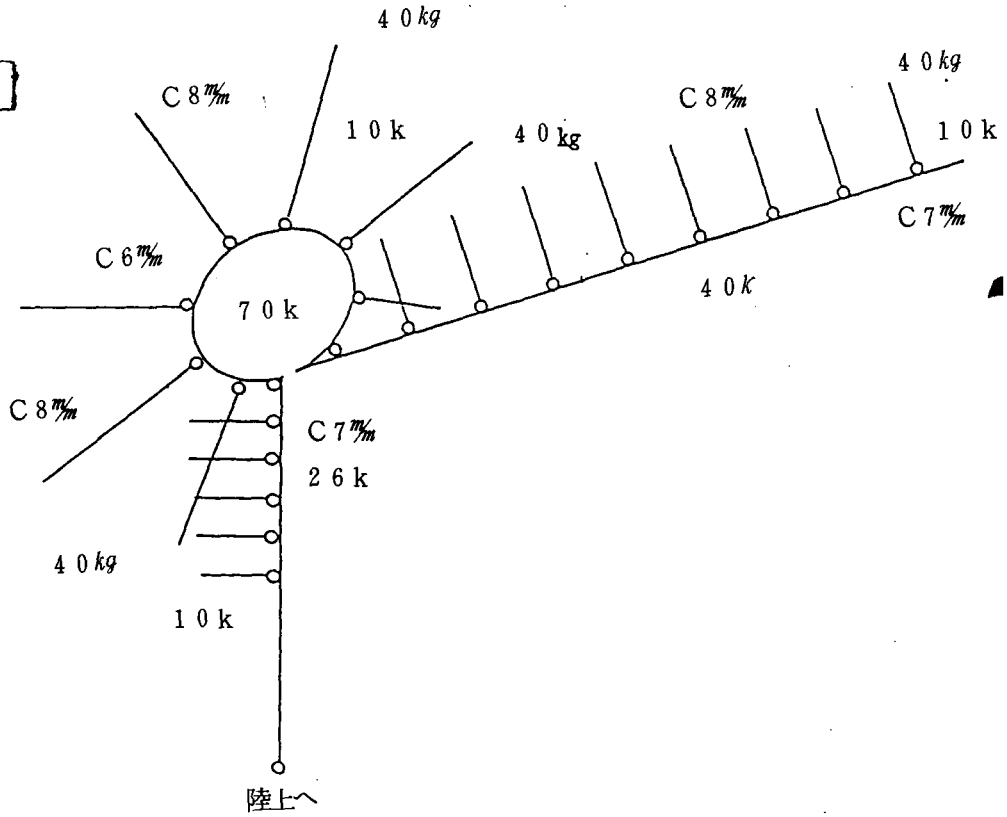
部　位	材　料　・　規　格	数　量　・　目　合　い
身　綱	クレモナ６㎜（浮子綱・沈子綱）	１００～１２０ｍ×２本
身　網	ナイロン網（１５本，１８本）	８節・１５本，５節・１８本
碇ロープ	クレモナ８㎜	約２０ｍ／１ケ所（夏～１０ｍ間隔，冬～５ｍ間隔）
碇	サンドバッグ２コ／碇ロープ１本	約５０コ（夏～１０ｍ間隔，冬～５ｍ間隔）
身浮子	100㎜×30㎜，プラスチック製浮子	１コ／２０cm（Ｙ－１６Ｌ）
身沈子	鉛２０匁	１コ／３０cm

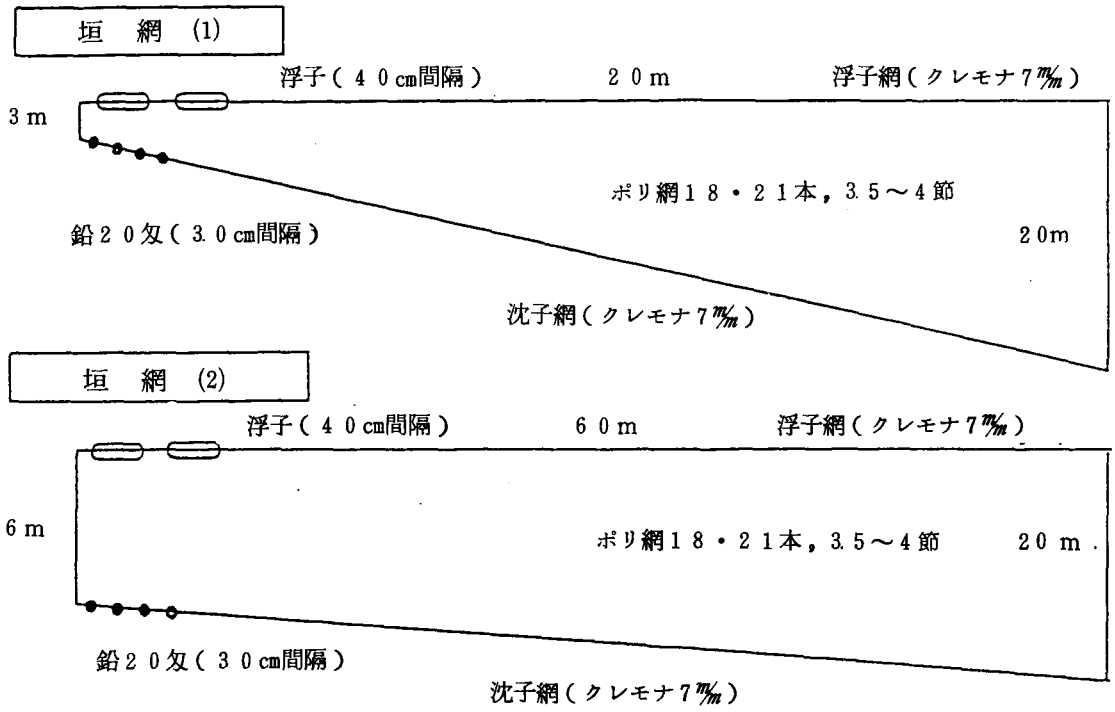
11. 漁具図または操業図

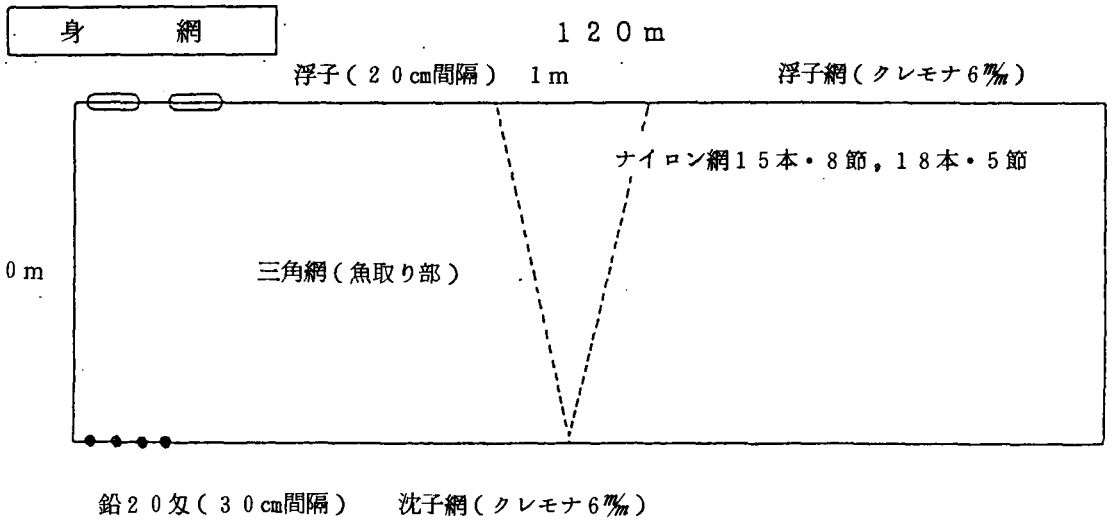
見取図



側張図







三角網（魚取り部）この部分をあけて袋状の網に魚を移動させる。

飼付け（ブリ飼付漁業）

1. 調査地： 川辺郡笠沙町片浦（野間池漁協）

2. 沿革

歴史は古く，明治３０年頃から始まり，明治３８年から株式会社で経営されたが，漁業法等の改正により昭和２６年から野間池漁協の自営として営まれ現在に至っている。

ブリ飼付は組合の経営にも大きな比重を占めており，水揚げは多い年は4万尾を越えたこともあったが，近年はやや減少して数千尾の水揚となっている。

１日の漁獲量は，その日の海況によって異なるが，普通漁で２００本前後，沖模様の良い時は1,０００～2,０００本が釣獲される。

魚体は，漁期初めには4 *kg*前後の小ブリが主体で，中頃には中型，終期になると8 *kg*～１０*kg*の大型魚が漁獲される。

3. 漁法

① 早朝撒餌及び掛餌を積み込み，7時頃出港して漁船に設置された根付けブイに繋船し，午前，午后の2回にわたって餌撒操業を行い，午后4時頃帰港する。

② 漁獲方法は浮釣と袋釣の2通りがあって，漁場の状況によって使い分ける。魚群が多く上層水深で魚の喰いがよいときは浮釣を活用し，それ以外は袋釣を使用する。もちろん浮釣の場合は船上から，そのまゝ水面に撒布する。また，下げ潮のときは潮待ちし，上げ潮のときだけは釣る。道具は潮上はオモリの重いもの，潮下は軽いものを使う。座つもりは艏と艫に経験者をおき，道具も2具を使用する。

③ 餌は５０～６０箱を使用（５箱が掛餌，３５箱を釣る時に撒き，残り20箱は釣り終ってから。明日にそなえて（すえ餌として必ず撒く。）また，漁が良くて撒餌が不足したときは，運搬船で（すえ餌）だけは必ず運搬する。

餌はウルメが最も良いが価が高いのでサバ（中，小）ムロ等を使って調整する。掛餌にはメチカの切身を使用する。特に喰いの悪い時は，餌持ちの良いものを使用した方がよい。

4. 漁　　期　：　９月～１２月　（盛期　：　１０月）

5. 漁　　場　：　野間岬南々東１.８㎞（昔から同じ箇所）

(1)　水深：８５ｍ

(2)　底質：泥土

6. 漁船規模及び乗組員

１０トン

１０名

7. 餌

撒餌・すえ餌	ウルメ（サバ・ムロ）
掛　　餌	メチカ切身

8. 主な漁獲物　：　ブリ（ヒラマサ・タイも混獲）

9. 漁獲物の処理　：　活〆め及び活魚により持帰り蓄養後出荷

10. 漁具構成

（袋釣具）

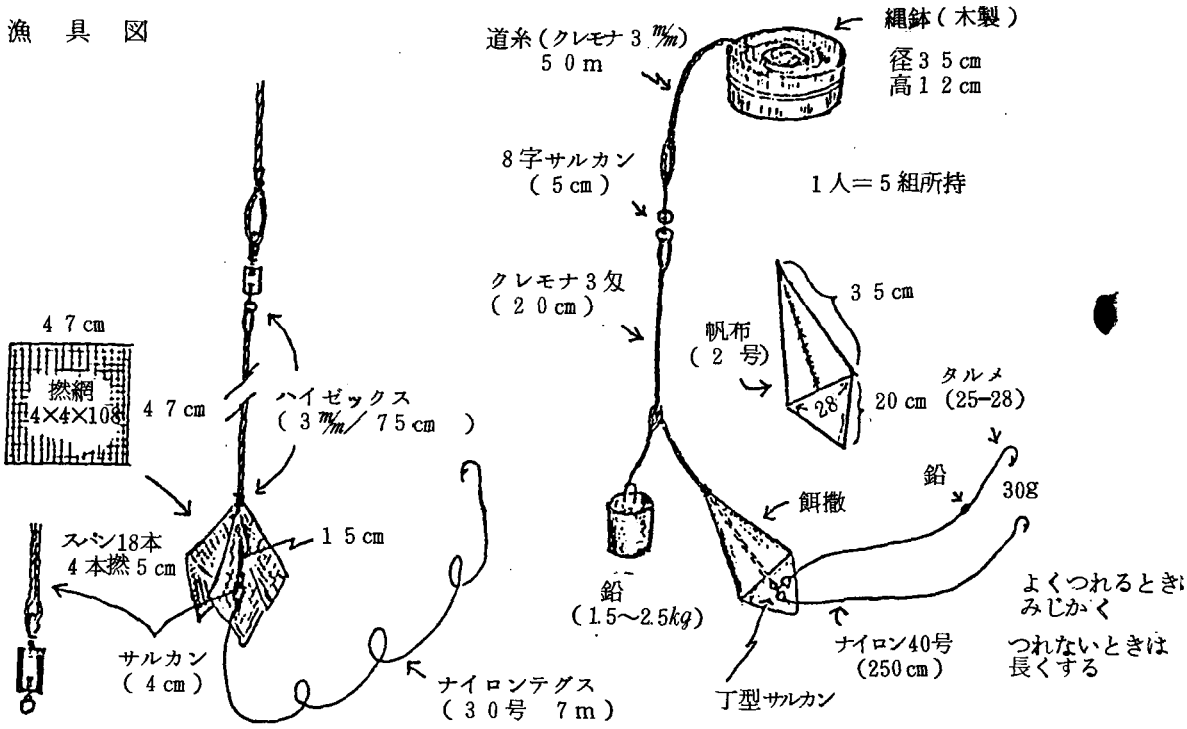
名　称	材　質	規格・寸法	数量	備　　考
縄　　鉢	プラスチック	径45cm，高さ20cm	1　個	
道　　糸	クレモナ	１２０本	５０ｍ	箱サルカン付
幹　　糸	クレモナ	３匁	２０cm	三又サルカン付
餌　　袋	帆　　布	３０cm×１５cm	1　枚	三角袋
錘	鉛　　製	1.５～2.５kg	1　個	
枝　　糸	ナイロン	４０号	２５０cm	
針	鋼　　製	タルメ針３０号	１～２本	

（浮釣具）

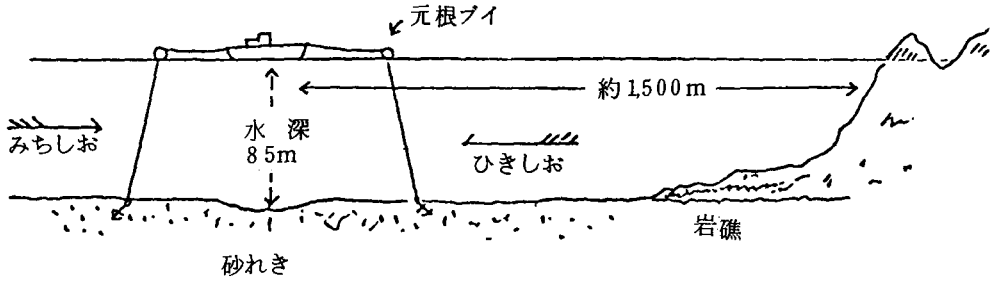
名　称	材　質	規格・寸法	数量	備　　考
幹　　糸	ハイゼックス	径３㎜	７５cm	
餌　　袋	帆　　布	４７cm×４７cm	1　枚	四角布
先　　糸	スパン	１８本	5　cm	サルカン付
枝　　糸	ナイロン	３０号	7　m	
針	鋼　　製	タルメ針３０号	1　本	

11. 漁具図または操業図

B 漁 具 図



操 業 図



ドンベ釣（フエフキダイ一本釣漁業）

1. 調 査 地 ： 川辺郡笠沙町片浦（野間池漁協　森　猛）

2. 沿　革

ずべいつり同様出水のタン（名前？）が持ち込んだ漁法と言われている。明治時代から森七熊氏等が営み，現在まで継承されている。

ドンベとは，野間池方面では石の事を言うが，昔は魚具を隠したり，掛った魚が逃げる時，音がするようにドビンを付けていたという。

3. 漁　法

潜ぐって道具を仕掛け，漁具をアワビの貝殻等でかくし餌をスズメダイ等から喰べられないようにして，石で海底をたたき濁すと，タバメが寄ってきて掛る。

4. 漁　期 ： 9月

5. 漁　場 ： 野間池地先

(1) 水深：5m～20m

(2) 底質：岩石

6. 漁船規模及び乗組員

1トン

4名～5名　1組

7. 餌 ： イセエビの身

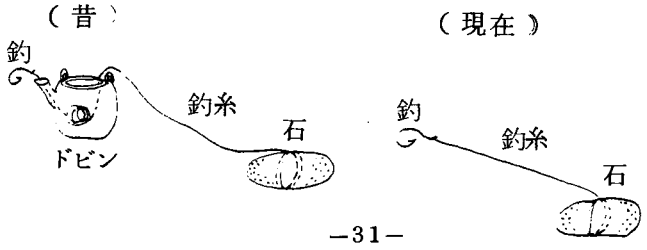
8. 主な漁獲物 ： フエフキダイ（タバメ）

9. 漁獲物の処理 ： 活魚

10. 漁具構成

- ○ 3～5kgの長い型の石（道具をくくりやすい石）
- ○ 釣糸1番線のはりがねを鎖状に加工したものを1m
- ○ 釣　タバメ釣

11. 漁具図または操業図



エソ釣（エソ一本釣漁業）

1. 調　査　地　：　串木野市西島平町（串木野市島平漁協）

2. 沿　　革

銀縄同様，江戸時代から始まったと推定され，帆船時代にはかなりの隻数が操業していたようである。昭和５０年前後が最盛と考えられ６０人程が操業していたが，現在では２０～３０人程が操業している。

漁具は戦前は針に鳥ホロを付けていたが，戦後にはゴムチューブを干切りにし，フグ，イカの切身を付けたもの，サラシのキレをつけたものへと移り変わり，現在では擬餌針を用いている。

漁具の巻き上げは昭和５５年頃から“かぐら”を用いるようになり，省力されてきた。

3. 漁　　法　：　帆走で終日釣り糸をシャクルようにして漁獲する。

4. 漁　　期　：　８月～１０月

5. 漁　　場　：　島平沖

(1)　水深：１０ｍ～３０ｍ

(2)　底質：砂泥

6. 漁船規模及び乗組員

１トン～２トン

１名　～２名

7. 餌　：　擬餌

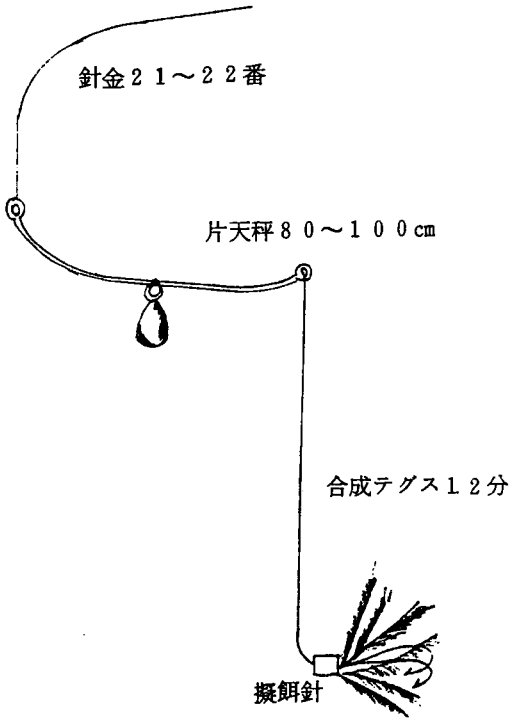
8. 主な漁獲物　：　マエソ，タチウオ，フグ類

9. 漁獲物の処理　：　鮮魚

10. 漁具構成

名　称	材　質	規　格　・　寸　法	数　量	備　　考
道　糸	針　金	21番～22番	５０ｍ	
枝　糸	合成テグス	１分２厘	0.8～1.5m	
針	擬　餌　針	２又型　２１～２２号	１個	
天　秤	片　天　秤	８０～１００cm	１個	１８０匁錘付き

11. 漁具図または操業図



タイかぶし釣（タイ・ハンカチ釣漁業）

1. 調　査　地　：　阿久根市晴海町（阿久根市漁協）

2. 沿　　革

この漁法は，昭和１１年頃，長崎県茂木から，ブり餌釣漁具として，導入された。導入当初は餌にアジ活餌を使用して，ブリ・ヒラス等が主漁獲物であったが，地元漁民により改良が重ねられ，昭和４７年頃からは，キビナゴを掛餌と撒餌としてタイを主な漁獲物とするハンカチ釣として操業されるようになった。

漁場は，野間池沖，甑島周辺，中ノ瀬周辺であったが，最近は，人工礁や大型魚礁周辺の人工魚礁も盛んに利用されるようになった。当初は，１０トン級の中型船が主であったが，現在は４トン型５０ＰＳ２人～３人乗りが中心で常時２５隻位が操業している。

3. 漁　　法

(1)　操業時刻：朝間ヅメ～午前，午後～夕間ヅメ

(2)　漁　　法：掛り釣（錨掛り）

(3)　船と瀬の位置：瀬上

(4)　その他（操業方法）

３～５トンの漁船に３名前後乗り組み，漁場着後，用意したキビナゴカブシ餌（包丁で細かく刻んだもの）に海水を混ぜ，軟らかくして，ハンカチで包む。この場合，釣元のテグスは，８字にたばねて，おもりでおさえるようにして包み投入する。海底から，１５～２０ｍ（１０ヒロ～１５ヒロ）位引揚げて，強く道糸を引くとハンカチの結び目がとけ，カブシ餌と釣餌が出る。

あらかじめ準備した竹ベラに道糸をかけ，これが終ると前と同じ操作で別の道具を投入する。このようにして，１人で２道具を使用する。

4. 漁　　期　：　１２月～５月（盛期：３月～５月）

5. 漁　　場

(1)　水深：７０ｍ～１００ｍ

(2)　底質：天然礁，人工礁

6. 漁船規模及び乗組員

3トン～5トン未満

2名　～3名

7. 餌　：

	掛　　餌	撒　　餌
種　類	キビナゴ	キビナゴ
大きさ	8cmを1尾掛	5kg／日・人

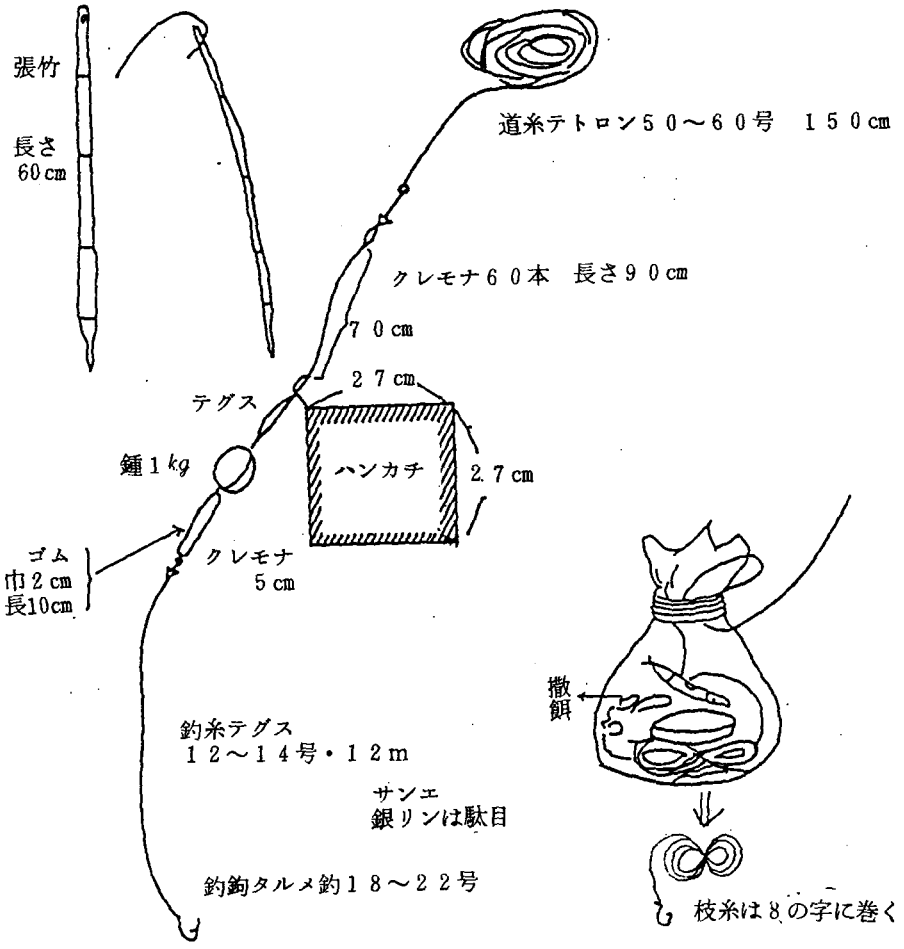
8. 主な漁獲物　：　マダイ

9. 漁獲物の処理　：　鮮魚（活かして持ち帰り，〆めてから出荷する）

10. 漁具構成

名　称	材質	規格・寸法	数　量
道　　糸	テトロン	50～60号　150m	1
幹　　糸	クレモナ	60本　　90cm	1
枝　　糸	ナイロン	12～14号　12m	1
釣　　針	鋼	タルメ釣，18～22号	1
重　　り	鉛	1　kg	1
ハンカチ	帆　　布	27　cm　角	1

11. 漁具図または操業図



タコひっかけ（タコ釣漁業）

1. 調査地： 出水郡長島町茅屋（長島町漁協）

2. 沿革

タコ釣は，かなり古くから操業され，調査した人は昭和２０年代からタコ釣を行っている。３０年代は茅屋地区でも４０隻以上のタコ釣漁船がいたが，現在はタコ壷，タコ籠の漁法にとって変わられ，２～３隻が当漁業を行っているだけである。

3. 漁法

1）操業時間：午前（小潮の時が良い）

2）漁法：流れ釣り（風帆）

3）その他

朝６時頃出港し，山当で漁場を選定し，潮に流れながらタコのあたりを待つ，あたりがきたら，すぐにあけずに，１～２回さぐり，重さを十分感じたら，一気にたぐり，その後は道糸を緩めないように釣りあげる。

道具は利き手で２漁具を用いて，それぞれ時間をおいて投入する。

帰港は１２時頃。

4. 漁期： ４月～９月 （盛期：５月～６月）

5. 漁場

(1) 水深：６０ｍ～７０ｍ

(2) 底質：瀬，石ころ場

6. 漁船規模及び乗組員

１５ トン

１ 名

7. 餌： タコ足，イイダコ，ベラ（２枚おろし）

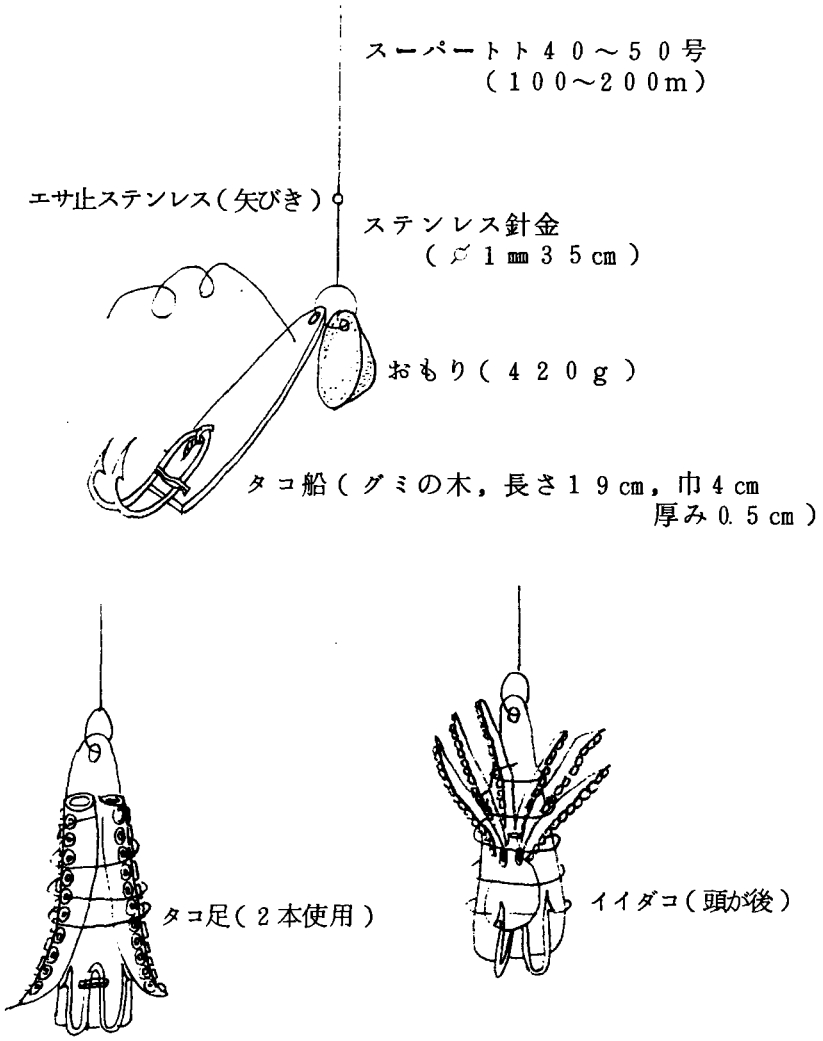
8. 主な漁獲物： タコ

9. 漁獲物の処理： 活魚

10. 漁具構成

名　　称	材　　質	規格・寸法	数　量
道　　糸	スーパートト	４０号～４５号	100～120m
枝　　糸	ステンレス針金	∅１㎜	３５cm
タコ釣針			１　個
タ　コ　船	グミの木	自作　長さ19cm幅4cm	１　個
重　　り	鉛	自作　４２０ｇ	１　個
餌　　巻	ステンレス	極小　矢びき	２５cm

11. 漁具図または操業図



はね釣（サバはね釣漁業）

1. 調　査　地　：　熊毛郡上屋久町一湊（上屋久町漁協　町田時弘　宏洋丸）

2. 沿　　革

はね釣りは，昭和３７～３８年頃一湊から千葉県銚子のサバはね釣漁船に出嫁ぎとして乗っていた者たちが技術を習得して地元に導入したものである。

その当時，一湊ではすでにサバ一本釣りは，地元の主幹漁業となっていたが漁法はテンビン釣りのみであった。その為サバが浮き上がり，水面まで見えてきてもテンビン釣りを行うという非能率的な操業をしていた。

はね釣りは，テンビン釣りに比べ，５～６倍も能率的であると言われ，またその頃からまき餌としてのタレクチイワシが鹿児島から十分入るようになったこともあり，普及していった。

漁場は，当時ロランも魚探もなかったこともあり，一湊近海がほとんどであったが漁業機器の普及に伴いサガリ曽根まで拡がり，現在ではサガリ曽根がサバの主漁場となっている。

漁具の構造等は基本的に変っていないが，擬似餌がサバ皮から色づけしたナイロン綿へ変わって持ちが良くなり，又，竿も竹からＦＲＰ製へと変った。

近年，はね釣りができる程の魚群の来遊が少なくなり，昭和６１年以降はね釣りは行われていない。従来のテンビン釣りは現在も行われているが，就業船も減り４隻となっている。

3. 漁　　法

(1)　操業時刻　　夜間（６時～６時）

(2)　漁　　法　　流し釣（風帆）

(3)　船と瀬の位置　　瀬の中

(4)　その他

魚探でサバの魚群を探し，まずテンビン釣りを行う，しだいにサバが釣り上って水深７～８ヒロの棚になると水面にサバの姿が見えるようになるので，はね釣りに切り替える。

まき餌を水面にまき，その中に擬似餌を投入する。サバが擬似餌に向って来るので，エサの前１０㎝くらいのところでサバに向け竿をはねる。釣り上げたサバは左手に持ったカギを鈎にかけひねるとはずれる。同時には

ずれた反動で，再び擬餌を魚群に入れ，これをくり返す。サバが擬似餌に喰いつく直前にはねるのがコツとされている。又，まき餌は塩づけより冷凍の方が水面に浮くので良い。

4. 漁　　期　：　4月～翌年2月

5. 漁　　場

(1)　水深：25m～40m

(2)　底質：天然礁

(3)　漁場の選定：魚探

6. 漁船規模及び乗組員

5トン～6トン

10名～14名

7. 餌

	擬　似　餌	撒　餌
種　類	ナイロン綿	カタクチイワシ
大きさ	黄，赤等に染色したもの	ミンチ

8. 主な漁獲物　：　ゴマサバ

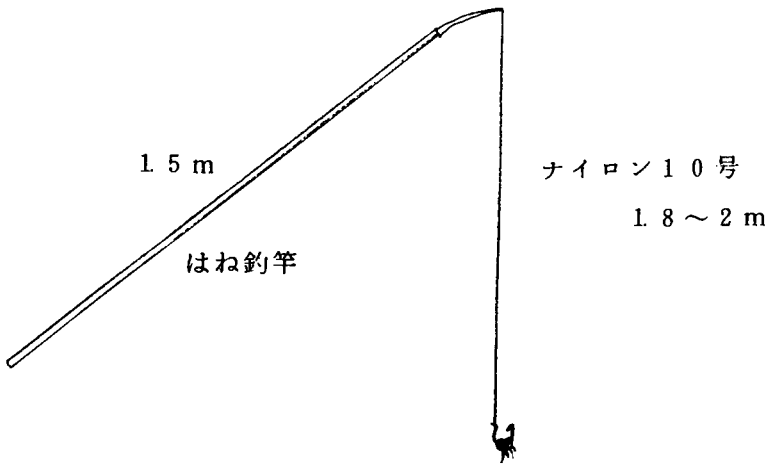
9. 漁獲物の処理　：　活魚で持ち帰り，帰港後首折

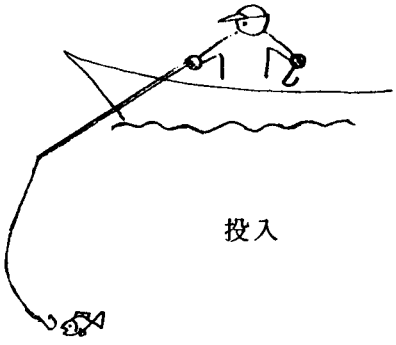
10. 漁具構成

名　称	材　質	規格・寸法	数量	備　考
道　糸	ナイロン	10号　1.8～2.0m	1	
釣　鈎	銅	環付アジ　12号	1	
竿	グラス	1.5m	1	

集魚灯　　水上灯　　10ケ×1,000W

11. 漁具図または操業図

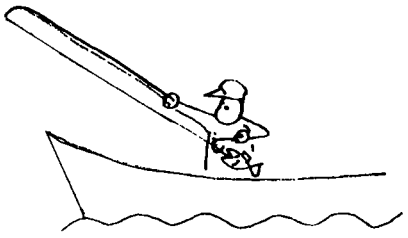




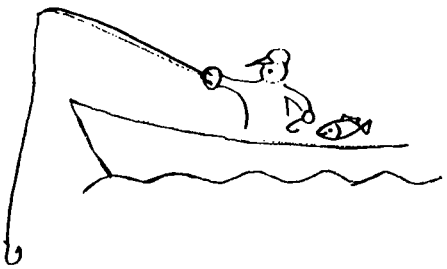
投入



はね



魚はずし



投入

タチ曳釣（タチウオ曳釣漁業）

1. 調　査　地　：　姶良郡隼人町浜市（錦江漁協）

2. 沿　　革

曳釣漁法導入以前当地区では一本釣により漁獲されていた。タチウオ一本釣は船竿釣で1隻当り4～8本の竿を出し，釣先は両天びん仕掛けで，1日当たりの漁獲量は10～20kgが限度であった。

導入のきっかけは，昭和51年9月に当組合が大分県国東町の曳釣業者を講師として招き3日程の試験操業を行ったことである。15～20分の操業で7～8本のタチウオが釣れるのを見て，早速曳釣道具を作製し，操業したとのことである。

曳釣の導入により1日当たり多い時は50～100kgの漁獲を得るようになった。

又当地区において曳釣が定着した一つの理由として，操業隻数が多い（最盛期には30隻位）ことである。タチウオは湾奥内を群をなして移動しており操業隻数が多いと容易に漁場を探索できるためである。

なお道具も導入当初は曳索がビシヨマであったものがステンワイヤーに，巻揚機も手動のタイコであったものが自動巻揚機に改良されている。

また，平成2年9月頃からは夜光タコボロを使用したところ喰いが変らなかったことから，現在ほとんどの船がタコボロを使用している。

3. 漁　　法

(1)　操業時刻　＝　朝間ヅメ，夕間ヅメ

(2)　曳航水深層　＝　底層曳

(3)　曳航速度　＝　2ノット前後

(4)　曳縄本数　＝　1本

(5)　その他（操業方法等）

○船をスローで前進しながら船尾から鈎を一本づつ左右に投げわけていき最後に道糸に結んで錘を一たん底までおろし，4m～5mひきあげて手にもったまま曳航する。

○タチウオの喰いはわかるので自然と延してやる。1回の操業は15～20分，揚縄は自動巻揚機でやる。

4. 漁　　期　：　１月～１２月　（盛期：４月～１０月）

5. 漁　　場

(1)　水深：８０ｍ～１５０ｍ

(2)　底質：天然礁（周辺）及びクレーター（海底火口）

(3)　漁場の選定：山当

6. 漁船規模及び乗組員

１トン～２トン　（５～１０P_S）

１　名

7. 餌

	生　　餌	擬　　似　　餌
種　類	カタクチイワシ	タコボロ（夜光厚肉），シラスキンキラ
大きさ	１０cm前後	3.0号（赤，緑，ピンク）

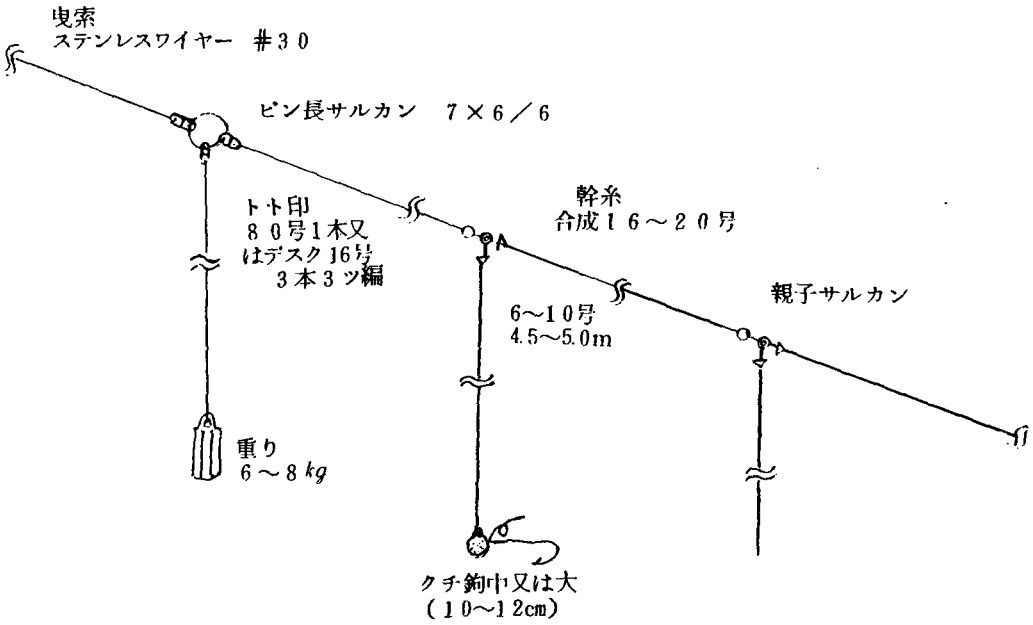
8. 主な漁獲物　：　タチウオ

9. 漁獲物の処理　：　水氷

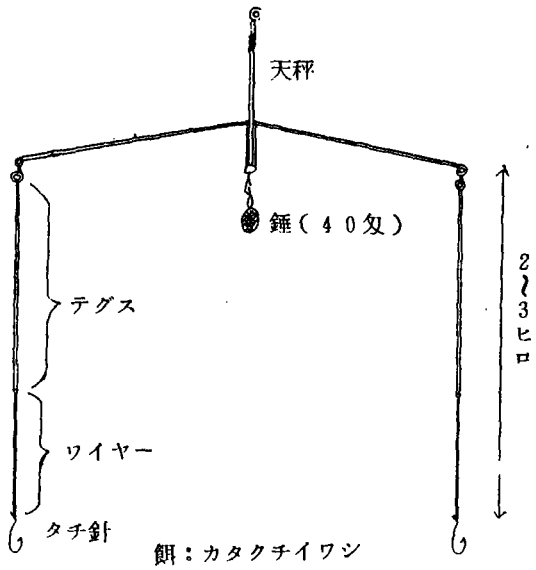
10. 漁具構成

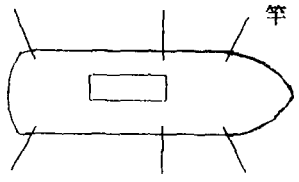
名　　称	材　質	規格・寸法	数　量	備　　考
曳　　索	ステンレスワイヤー	＃３０　１５０ｍ	１　本	
幹　　糸	合　　成	１８～２０号（６×７ｍ）×２０本	２０本	
技　　縄	〃	6～10号　4.5～5.0ｍ	２０本	技間６～７ｍ
釣　　針	鋼	タチ鈎（１１～１２cm）	２０本	
重　　り	船	６　～　８kg	１　ケ	
サルカン	シンチュウ	ビン長　サルカン		

11. 漁具図または操業図



参考：タチ一本釣





○　道具が底に着いてから８ヒロ位上げるのが基本であるが，タチの棚は時間変動があるので棚取りの感の良さが漁獲に影響した。

メチカ曳縄（ソーダガツオ曳縄漁業）

1. 調　査　地： 川辺郡笠沙町片浦（笠沙町漁協）

2. 沿　　革

曳縄の盛んな笠沙町仁王崎で，ヨコワ，シビ，カツオ等の洄遊魚種の曳縄の組合せ漁業として営なまれてきたが，近年メチカの洄遊が少なく，ほとんど操業されていない。

メチカは雑節の原料として，枕崎，山川へ出荷されていた。

現在は，これを応用し，水族館に展示用として出すカツオ，キハダや養殖用種苗としてのキハダ採捕が時期的に営まれている。

漁具漁法については昔から変化はないが，ただ漁具材質が化学繊維に変り，漁船規模が２～３ｔから３～７ｔのＦＲＰ船へ変化し船足が送くなっている。

3. 漁　　法

潮目や鳥流木等により漁場を探索するが，曳縄漁具はあらかじめ準備し，魚群を見つけたら船足を約４ノットにし，魚が喰い付いたら揚げる。

魚が入れ喰い状態になったら一番手前の短い漁具で操業する。

漁獲物は水氷にし当日揚げとするが，入札に間に合わない時は翌朝揚げとする。

4. 漁　　期： ６月～８月

5. 漁　　場： 南薩海域

潮目や，鳥，流木等を探索し操業する。

6. 漁船規模及び乗組員

３トン～７トン

１名　～２名

7. 餌

擬似餌	撒　　餌
ホ　ロ	シラス（ソーメンを混ぜる）

8. 主な漁獲物： ソーダガツオ・カツオ

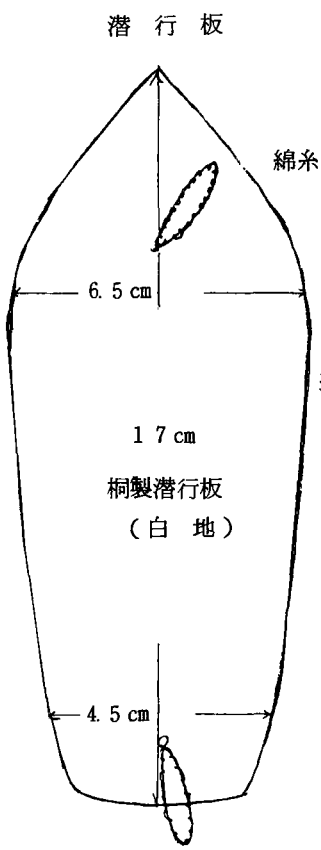
9. 漁獲物の処理： 水氷

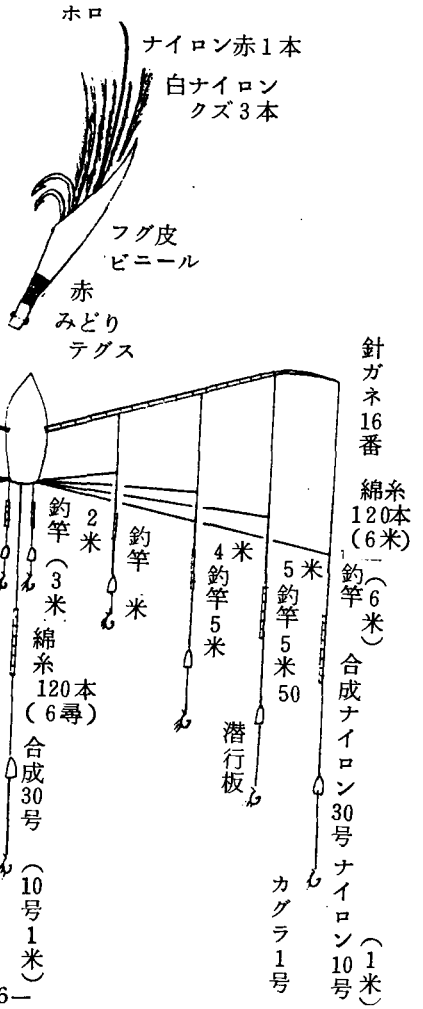
10. 漁具構成

ア　ホ　　ロ	擬餌　鳥毛	ナイロン製（白3本）
イ　釣　　鈎	2又釣	（赤1本）
ウ　ひきなわ		
①　本，ヨマ	綿糸　60本	12尋～13尋
②　ワイヤー		
③　テグス	ナイロンテグス	3分　2尋
④　サルカン		
⑤　錘		
⑥　根　　竹	2本～3本	2年～3年
エ　潜　行　板	桐　製　長17cm	

11. 漁具図または操業図

漁　具　図





秋太郎縄（バショウカジキ延縄漁業）

1. 調査地： 日置郡東市来町伊作田（江口漁協）

2. 沿革

秋太郎縄は戦後間もなく江口，市来町（戸崎），串木野市，串木野市島平の漁業者約２０名程で西薩沖，水深約１００メートルの海域で始められた。

その後，南薩地域では活サバ（時にアジ）を餌にカン流し漁法で漁獲されていたが，西薩地区では普及せず，昭和５０年前後に流し網が導入され，それを境に流し網で漁獲するようになり，現在江口漁協では約３０人が流し網を操業している。

3. 漁法

操業は早朝未明より投縄を始める（活き餌は夜間漁場付近のサバ漁場で釣獲したものを船内生簀に蓄養する）餌サバを針にかけ（第２背鰭付近）スローで投縄する。投縄終了後，浮子まぎりしながら釣れた魚を取り上げ，手曳きで揚縄する。

4. 漁期： ８月～９月

5. 漁場： 江口沖

(1) 水深：１００ｍ

6. 漁船規模及び乗組員

３　トン

２　名

7. 餌： サバ活餌，アジ活餌

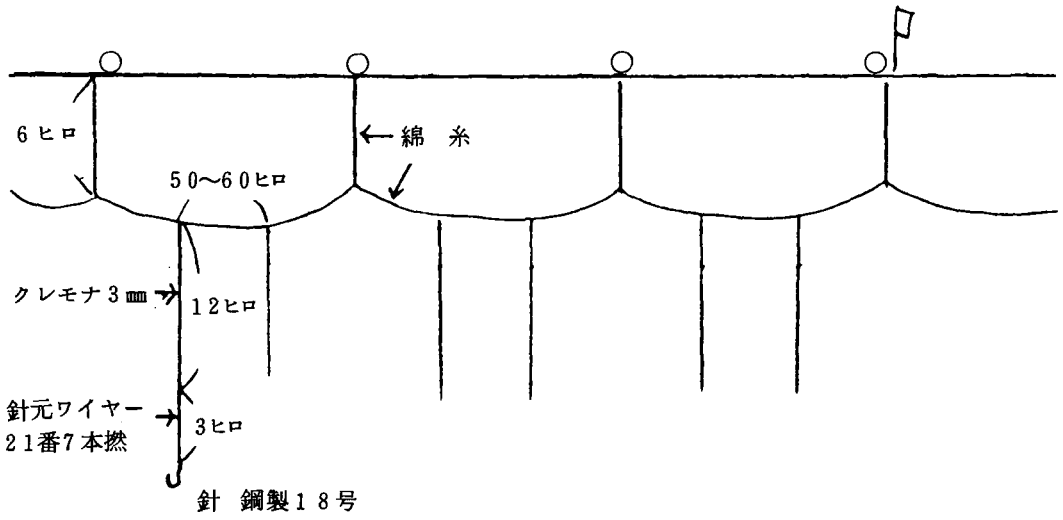
8. 主な漁獲物： バショウカジキ，クロカワカジキ，メカジキ，サメ類

9. 漁獲物の処理： 鮮魚

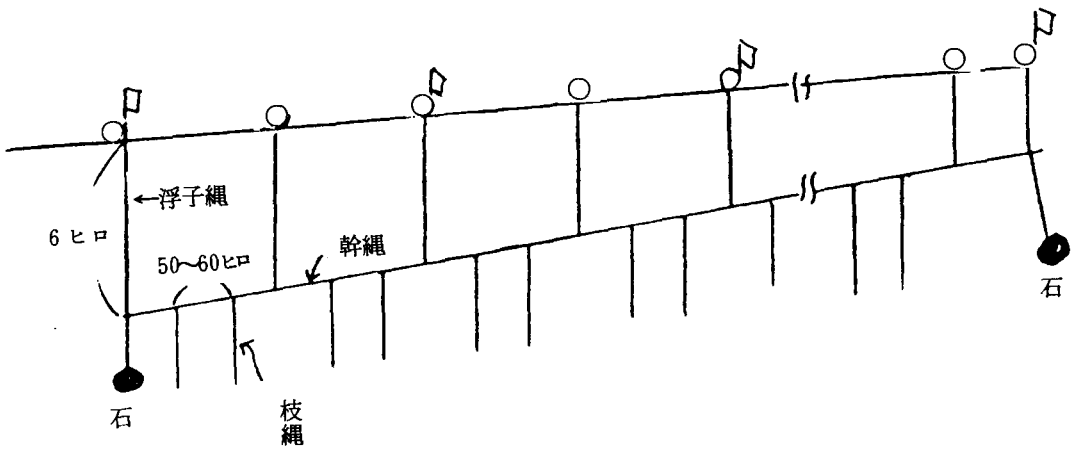
10. 漁具構成

名称	材質	規格・寸法	数量	備考
浮子縄	綿糸	９０～１５０本	６尋	枝縄２本毎に１本
幹縄	綿糸	９０～１５０本	５００尋	
枝縄	クレモナ	３mm　１２尋	６～７本	枝間５０～６０尋
針元	ワイヤー	２１番７本撚　３尋	６～７本	
針	鋼製	１８号	６～７個	枝縄２本毎に１個
浮子	竹，キリの木	径４～５寸，長さ２尺	２～３個	
使用鉢数	６鉢（１鉢に枝縄１２本）			

11. 漁具図または操業図



操　業　図



銀縄（オキエソ延縄漁業）

1. 調　査　地　：　串木野市西島平町（串木野市島平漁協）

2. 沿　　革

銀縄は江戸時代慶応年間頃に始まったと言われ，当時は櫓漕ぎ船であったため，島平の極沿岸域で操業していたものと考えられる。明治初期には帆船に変わり２～３人で漁をし，昭和初期頃から久多島付近に漁場が移り，昭和２５年頃には４０～５０隻が操業して最盛を究めたが，漁業権制度が浸透し始めた昭和４０年頃に漁業権の違いにより操業が困難となり，下火になった。

漁具も幹縄，枝糸に渋柿で染めた"苧"を用いていたが，腐れやすく，手がかかるといった難点があった。その後綿糸が使われ，昭和４０年頃には，クレモナが使われていた。

3. 漁　　法

夜明け時２鉢位づつ２～３か所に投縄する。投縄約２０分後揚縄し，漁獲物を収容する。正午頃までこれを２～３回繰り返す。

4. 漁　　期　：　７月～９月

5. 漁　　場　：　伊作沖，久多島周辺海域

(1)　水深：２５ｍ～４０ｍ

(2)　底質：砂，砂泥

6. 魚船規模及び乗組員

１　トン

１名　～　２名

7. 餌　：　フグ皮身（塩付け）

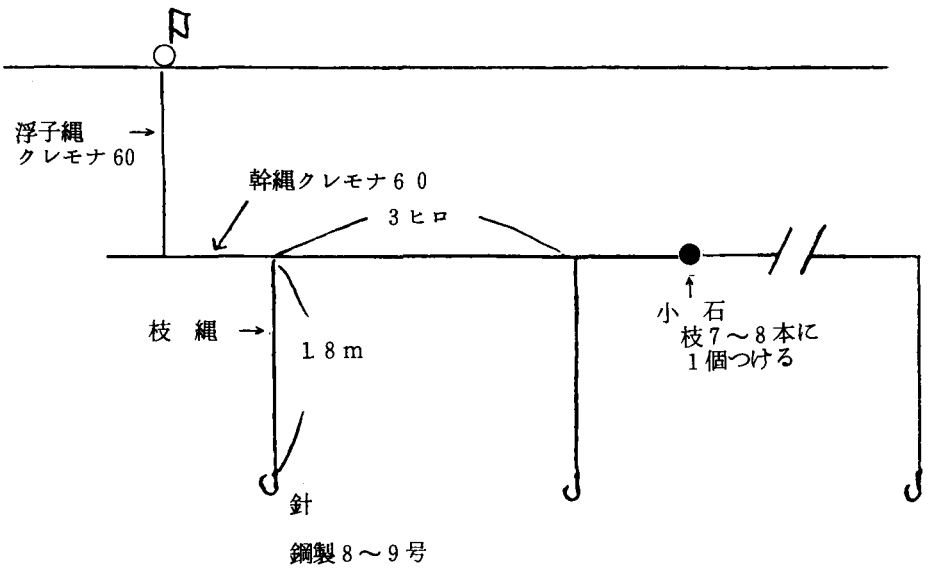
8. 主な漁獲物　：　オキエソ（銀エソ），テンヌ，サメ

9. 漁獲物の処理　：　鮮魚

10. 漁具構成

名　称	材　質	規　格　・　寸　法	数　　量	備　考
浮　子　縄	クレモナ	６０本	４０～６０ｍ	
幹　　縄	クレモナ	６０本	５４０ｍ	枝間3尋(4.5m)
枝　　縄	合成テグス	8号	1.8ｍ	
針　　元	合成テグス	8号	１０cm	
針	鋼　　製	8～9号	１２０～１３０本	
浮　　子	桶		２個	
縄　　鉢	木　　鉢		１鉢	
使用鉢数	6～8鉢	（１鉢に枝縄１２０～１３０本）		

11. 漁具図または操業図



ダント縄（アマダイ・キダイ延縄漁業）

1. 調　査　地　：　串木野市西島平町（串木野市島平漁協）

2. 沿　　革

明治の初期頃から操業されていたと推測されている。操業は大正，昭和と時代の変遷を経て，現在に至っている。

漁具の幹縄，枝縄にオ（苧），綿糸が使用されてきたが昭和４０年代にはクレモナ，ナイロンが使われるようになり，また，揚縄は手作業で行なわれていたが，ラインホーラーが導入された。

3. 漁　　法

ロランで位置を確認，夜明け頃投縄を開始し，約１時間で投縄を終了する。投縄は通常瀬をまくような形でスローでトモから行う。

揚縄は元の位置にもどりラインホーラーにより，ゴーヘイ，スローで揚げる。

4. 漁　　期　：　９月～翌３月　（盛期：９月～１２月）

5. 漁　　場　：　串木野沖

(1)　水深：３０ｍ～２００ｍ

(2)　底質：砂泥

6. 漁船規模及び乗組員

３　トン

１　名

7. 餌

種　類	イカ切身	アミ	沖エビ
大きさ	１×２㎝	１尾掛	１尾掛

8. 主な漁獲物　：　アマダイ，キダイ，イトヨリ

9. 漁獲物の処理　：　活魚又は水氷

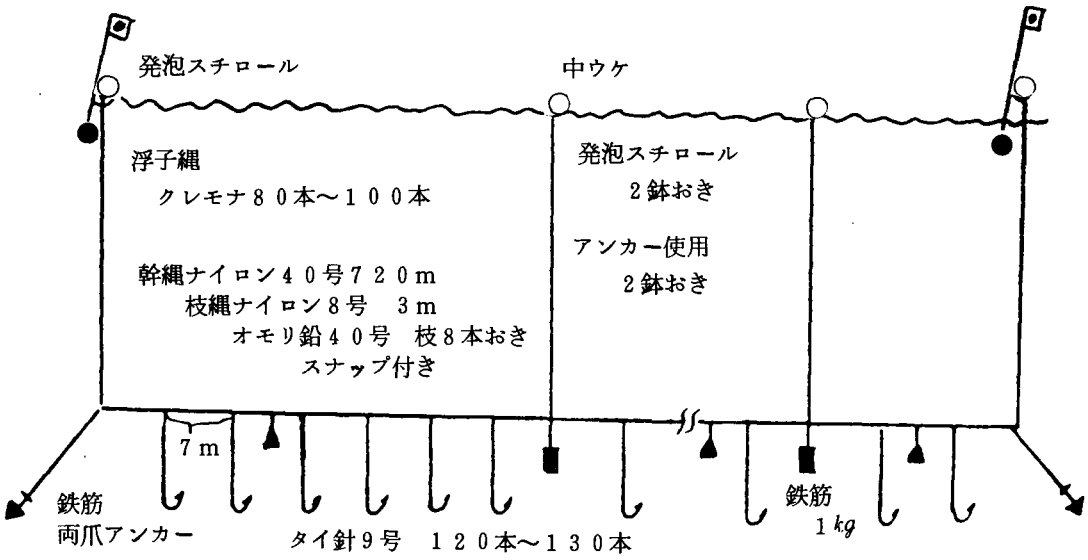
10. 漁具構成

（１鉢分）

名　称	材　　質	規格・寸法	数　　量	備　　考
浮子縄	クレモナ	８０本～１００本	４０～２５０m	
幹　縄	ナイロン	４０号	７２０m	
枝　縄	ナイロン	８号	1.8m	枝間６m
釣　針	タイ針	９号	１２０本	
重　り	鉛	４０号スナップ付き	１５個	枝縄８本毎に１個
浮　子	発泡スチロール	軽３０～４０cm	２個	
縄　鉢	ポリ製籠	軽５５cm	１個	

使用鉢数　　６～７鉢（１鉢に枝縄１２０本～１３０本）

11. 漁具図または操業図



６～７本使用

アラカツ縄（カサゴ延縄漁業）

1. 調　査　地　：　阿久根市脇本（黒之浜漁協）

2. 沿　　革

アラカブ縄は，古くから行われていたが，本格的に漁業として操業されるようになったのは，戦前の昭和１０年代からと言われ，黒之瀬戸海峡を中心に無動力船で操業されていた。

昭和４５年頃には，船数も２４，２５隻に増え，動力化により漁場も拡大甑島周辺や野間池沖まで出漁し，水揚げも増大し１日５００kgも漁獲する船もあった。漁具，漁法は殆んど変らず，現在は１２～１３隻が操業しているが，その水揚げは，乱獲や資源減少により，年々低下の傾向にあり，魚体は，小型化したものの，取引きは高値でキログラム当り2,０００～2,５００円の時もあり，関西方面には特に人気があり，引合いが多い。

3. 漁　　法

(1)　投縄時刻：朝間ヅメ

(2)　揚縄時刻：午　前

(3)　投縄時間：１時間（投縄終了後潮上から揚げる）

(4)　揚縄時間：2.５時間

(5)　その他（操業方法等）

前日に縄を繰り直し，エサ掛けした道具を木製トロ箱にたぐり込んでおく（以前は夜明に改めて道具を桶にたぐり直して出漁する船もいた）。漁場に着くと浮標縄，イカリと道具を連結し，潮上よりやや斜に延える。一般的には，５鉢連結を１連とし，２連で操業する。延え終ったらすぐに潮上から手引きにて上げる。帰港後，翌日のための縄くり，餌かけを行う。

4. 漁　　期　：　周年　　（盛期：１月～３月）

5. 漁　　場

(1)　水深：１ｍ～１００ｍ

(2)　底質：岩礁地帯

6. 漁船規模及び乗組員　：　１トン　～　３トン

２　名

7. 餌

種　類	サバ塩漬（最近はハマチ，シイラも使用している）
大きさ	短冊切り（１cm×４cm×0.５cm）

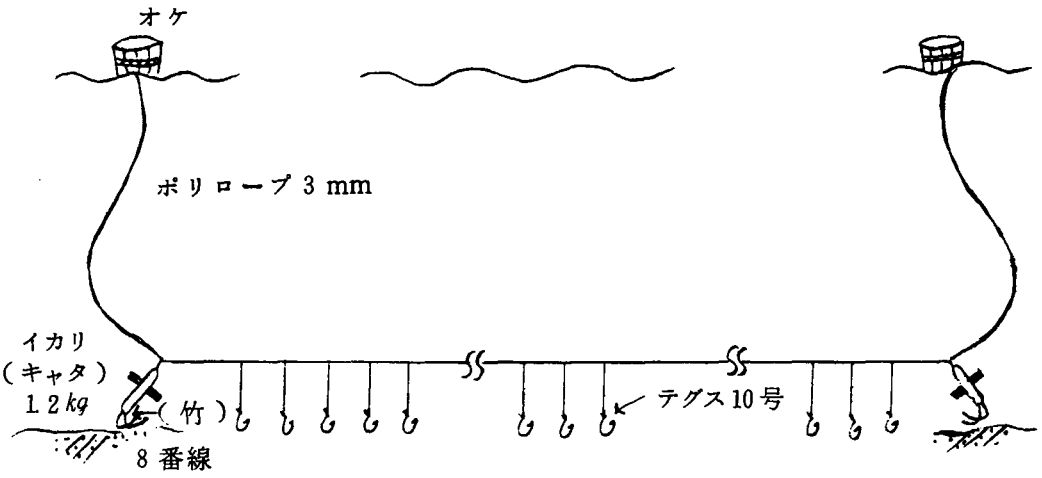
8. 主な漁獲物　：　カサゴ（アラカブ）

9. 漁獲物の処理　：　鮮魚（活魚で持ち帰り，〆めて出荷する）

10. 漁具構成

名　称	材　質	規格・寸法	数量	備　　考
浮子縄	ポリロープ	３mm	１００m	水深により調節
幹　縄	クレモナ	１２０本	１６０m	
枝　縄	ナイロンテグス	１０号	８０m １６０本	枝間　１m
釣　針	鋼	タイ延縄　　１０号	１６０本	
重　り	鉛	８号×４個＝３２匁	８個	
使用鉢	木	４５×６０×１５cm	１０鉢	
浮　子	木	オ　ケ	２個	１連に２個

11. 漁具図または操業図



ハモ縄（ハモ延縄漁業）

1. 調　査　地　：　出水郡東町葛輪（東町漁協）

2. 沿　　革

本漁業は，昭和２０年代に天草方面から導入された。

昭和４０年代には串木野方面へ新規漁場開拓を行ったこともあるが，現在は不知火海での操業が多く，魚類養殖漁業，ヒトエグサ養殖などの発展もあり，一時期は葛輪地区の漁業者が主に操業するだけまで減少したが，最近はハモの高価格で見直され，現在は５０隻程の漁船が操業している。

ここ数年は，オヨギピンノの異常発生でハモがこのカニをおって浮き上がり，刺網で漁獲されるようになり，漁場の競合がおこっている。

3. 漁　　法

(1)　投縄時刻：日没前後

(2)　揚縄時刻：投縄時刻後１.５～２時間後に始める。

(3)　投縄時間：１時間

(4)　縄待時間：０.５～１時間

(5)　揚縄時間：３～４時間

(6)　縄揚はラインホーラ使用

(7)　その他

日没時に漁場に着くように出港（午後３時から５時）し，ロラン，魚探で漁場を選定する。

日没と同時に投縄開始，投縄終了後最初に投縄した所に帰り，縄を揚げる。

ハモが釣れたら，枝縄の釣元より切断してダンブルで活かす，釣はそのままで活魚出荷する。

4. 漁　　期　：　５月～７月

5. 漁　　場

(1)　水深：３０ｍ～５０ｍ

(2)　底質：泥

6. 漁船規模及び乗組員

3トン～4トン

2　名

7. 餌

種　類	活アジ　仔	赤　イ　カ
大きさ	5～10cm	3cmの輪切

5～6月は赤イカがよく釣れ，7月以降は活アジ仔餌がよく釣れる。活アジ仔餌は腹掛け。

8. 主な漁獲物　：　ハモ，グチ，タチウオ

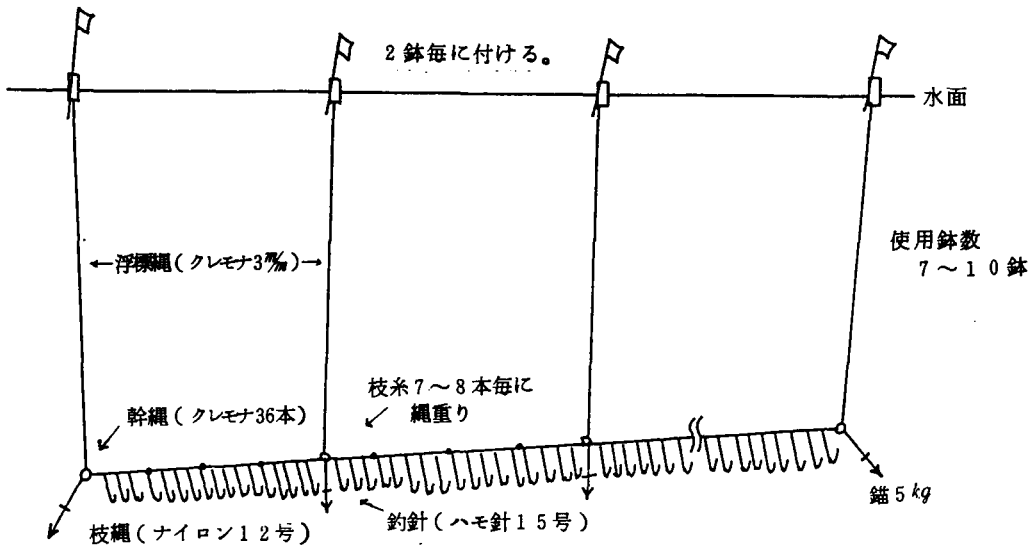
9. 漁獲物の処理　：　活魚

10. 漁具構成

（一鉢分）

名　称	材　質	規格・寸法	数　量	備考
浮子縄	クレモナ	φ3㎜　150m	2鉢間に一本	
幹　縄	クレモナ	36素　1000m	一本	
枝　縄	ナイロン	12号　3ヒロ	100本	
釣　針	鋼	ハモ釣15号	100本	
重　り	鉄	錨　5kg	2鉢間に一個	
縄重り	鉛	40～50g	7～10釣ごとに一個	
浮　子	合成浮子	φ30cm	2鉢間に一個	
鉢	プラスチック	50cm×38cm×16cm	一個	

11. 漁具図または操業図



キダカテゴ（ウツボ籠漁業）

1. 調　査　地　：　肝属郡佐多町大泊（佐多岬漁協）

2. 沿　　革

キダカテゴは，ふるくから当地区にある漁法で，そのルーツは定かでない。しかし，周辺の地域をみまわしてみても当地区ほど，ウツボを珍重するところはなく，今も正月はもちろんのこと運動会や祝事には必ずウツボの塩干しが膳をかざる。このようなことから，むかしは漁師のほとんどが２～３個の竹で編んだ筒籠（胴まわり約５０cm，長さ約１ｍ）を持って祝事の前に漁をしていたらしい。

ところが，この竹製籠の製作技術者が少なくなったことや昭和４０年代半ばに塩干問屋が出現し，ウツボ塩干しもここで作るようになったため，自家用としての操業も減り，漁期に専業で行なう者は４人ほどとなり，地区の塩干問屋２業者からの注文を受け漁をおこなっている。

キダカテゴの要は入口のジョーゴであり，籠本体がライト管に変わった今でも竹製が用いられている。

3. 漁　　法

一般的には，夕方漁場に籠を投入し，翌朝引揚げ漁獲する。夜間に操業することがあり，この場合籠は海中に２～３時間漬けた後引揚げ漁獲する。１晩に３～４回操業する。

4. 漁　　期　：　９月～１０月

5. 漁　　場

(1)　水深：６ｍ～２５ｍ

(2)　底質：瀬場

6. 漁船規模及び乗組員

0.9トン～３トン

１　名

7. 餌

種　類	サバ，イワシを手でちぎったもの
大きさ	1籠に3～5握り

8. 主な漁獲物　：　ウツボ（たまにタコが入る）

9. 漁獲物の処理　：　活魚

10. 漁具構成

(1)　籠（単式）

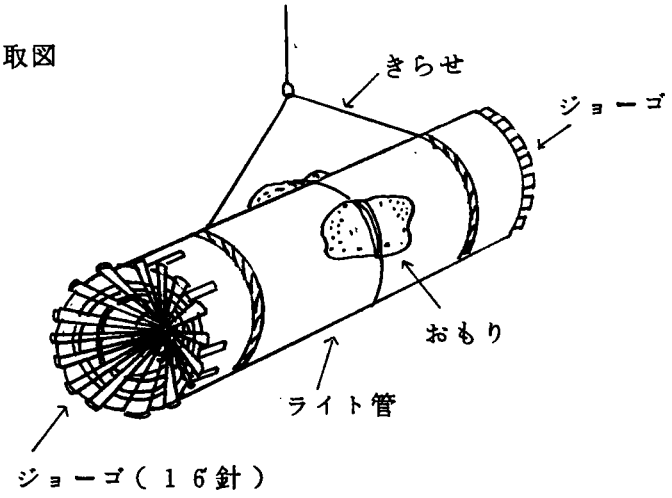
名　称	材　質	規格・寸法	数　量	備　考
籠本体	ライト管	ø180㎜×800㎜	1	
ジョーゴ	竹　製	外ø180㎜，中ø80㎜	2	
枝　縄	混　合	ø5㎜，4m	1	
浮子縄	ポ　リ	ø6㎜，30m	1	
目浮子	なんでも	籠が抵抗を受けない程	1	
	よい	度の目浮		
つなぎ	混　合	ø4㎜，3m	1	
きらせ	スパン	24号，1m	1	
おもり	石	150モンメ	2	

(2)　延縄式

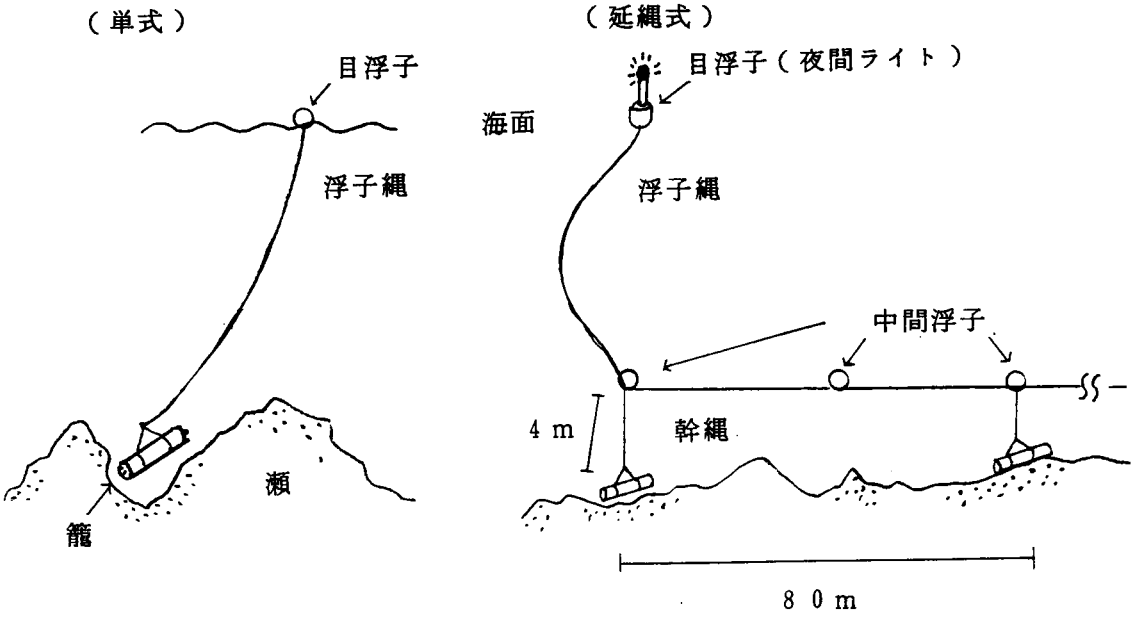
名　称	材　質	規格・寸法	数　量	備　考
キダカテゴ	ライト管，竹	ø180㎜×800㎜	5～9	
浮子縄	ポリ	ø6㎜，30m	2	
幹　縄	ポリ	ø6㎜，200m	4	
枝　縄	混合	ø5㎜，4m	5～9	枝間80m
中間浮子	（なんでもよい）	幹縄が浮く程度	9～17	
つなぎ	混合	ø4㎜，3m	1	
きらせ	スパン	24号，1m	1	
おもり	石	150モンメ	2	両端は2倍のおもり

11. 漁具図または操業図

籠見取図



操　業　図



イカ籠（甲イカ籠漁業）

1. 調査地： 日置郡吹上町入来（吹上町漁協）

2. 沿革

甲イカ籠は明治時代頃から行われていたと考えられているが，もっとも盛んに行われていたのは終戦後から昭和44年頃までで，吹上地区で30隻程度が操業していた。昭和50年頃までは竹製の籠を使用していたが，製作や取り扱いに手間がかかること，籠がかさばることなどから以降は折り畳み式の籠が普及した。しかし，その頃には昭和45年から当地区で導入された吾智網主体へ漁業形態が変わってきており，また，刺網（三重網）で甲イカが混獲されるようになったことなどから，操業隻数も減り，現在では永吉地区で船外機を使用し5名程度が小規模に操業されている。

3. 漁法

水深10～25mの漁場に投入敷設し，朝，夕の2回手揚げで揚籠する。取り込み後は，直ちに投籠する。

4. 漁期： 4月～7月上旬

5. 漁場： 吹上沖

(1) 水深：10m～25m

(2) 底質： 砂

6. 漁船規模及び乗組員

1 トン

1 名

7. 餌： 籠内にシバを取り付ける。

8. 主な漁獲物： 甲イカ

9. 漁獲物の処理： 鮮魚

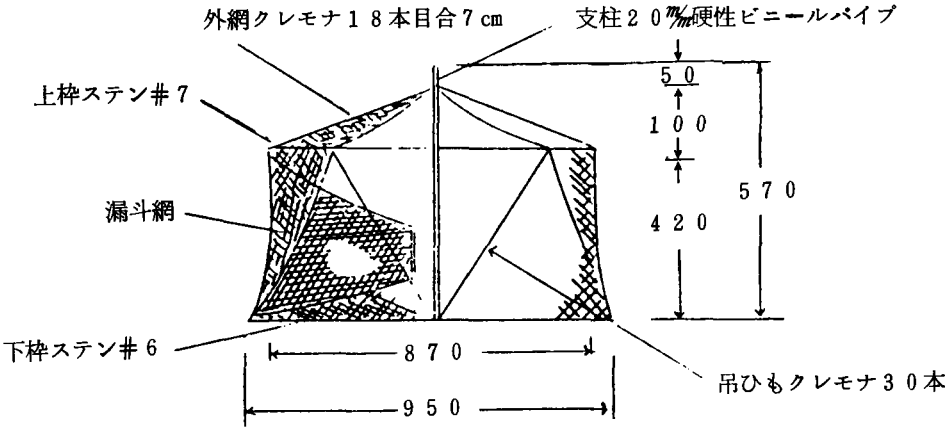
10. 漁具構成

1組 幹縄，クレモナ3匁360～400m，浮子縄，クレモナ5匁45m×2
ポンデン ポリ玉300㎜2個 錨5kg2丁 かご18～20個

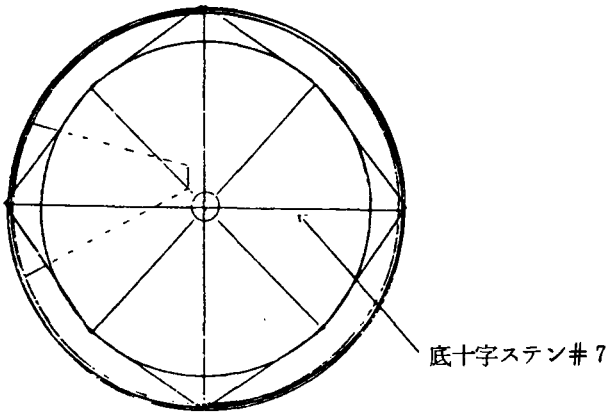
甲いか籠1個分の所要資材表

名称	材質	規格	数量	備考
枠	ステンレス	＃7～＃6	8m	
外網	クレモナ	18本×7cm 80目掛	91cm	169cm
底網	〃	18本×7cm 〃	53cm	
漏斗網	〃	18本×7cm	25cm	
吊ひも	〃	30本～60本	7.50m	
支柱	硬性ビニール	ø20㎜×57cm	1本	

11. 漁具図または操業図



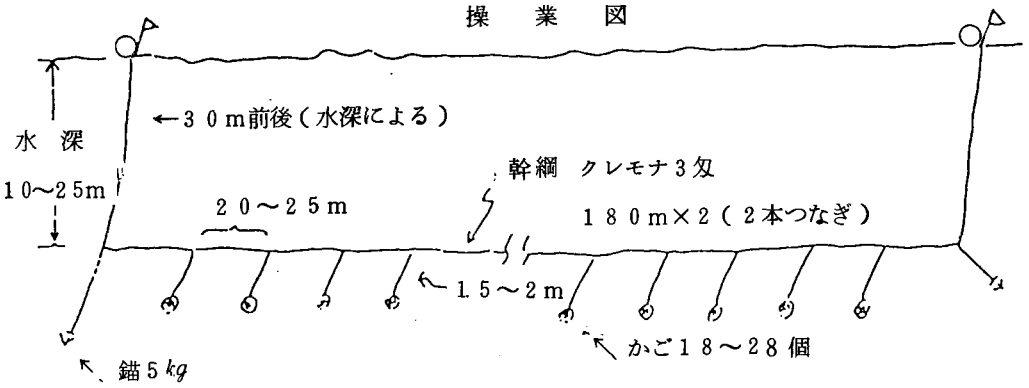
側　面　図



平　面　図

改良１号型甲いか籠（Ｓ　５０．以降）

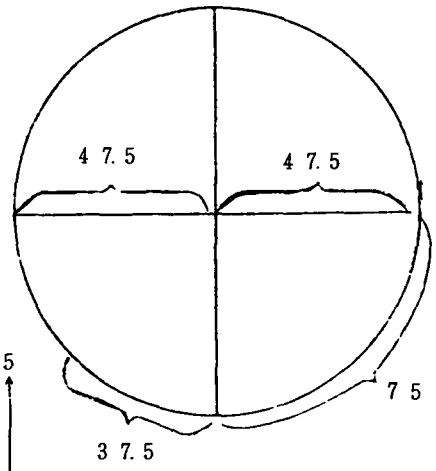
操　業　図



参　考

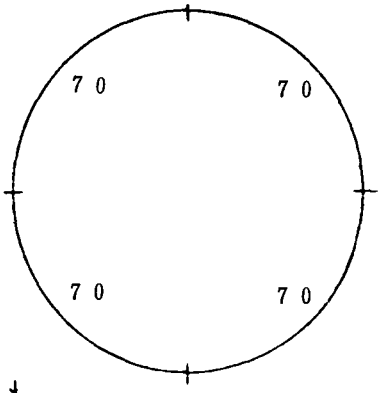
寸　法＝cm

底　　枠



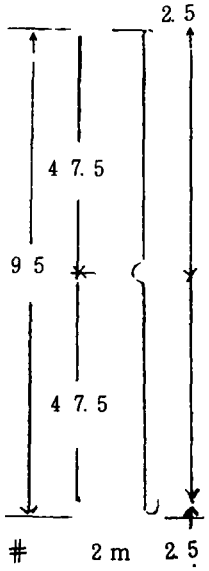
3.10m

上　　枠



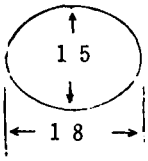
2.90m

十　字

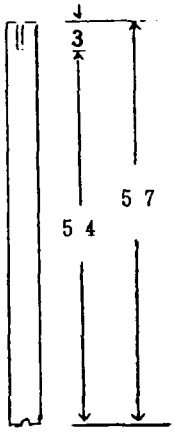


＃　2m　2.5

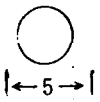
漏斗口



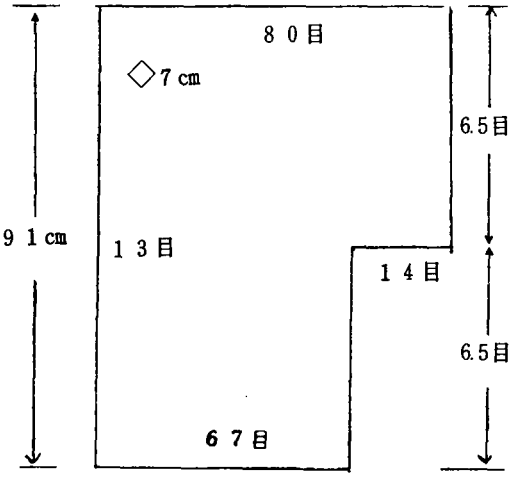
＃12　50cm



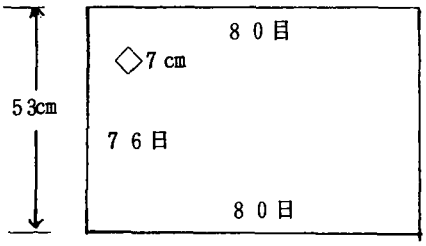
支　柱



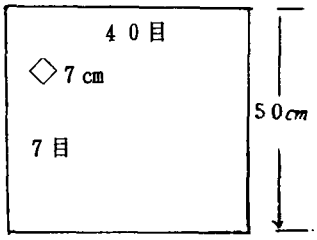
＃12　17cm



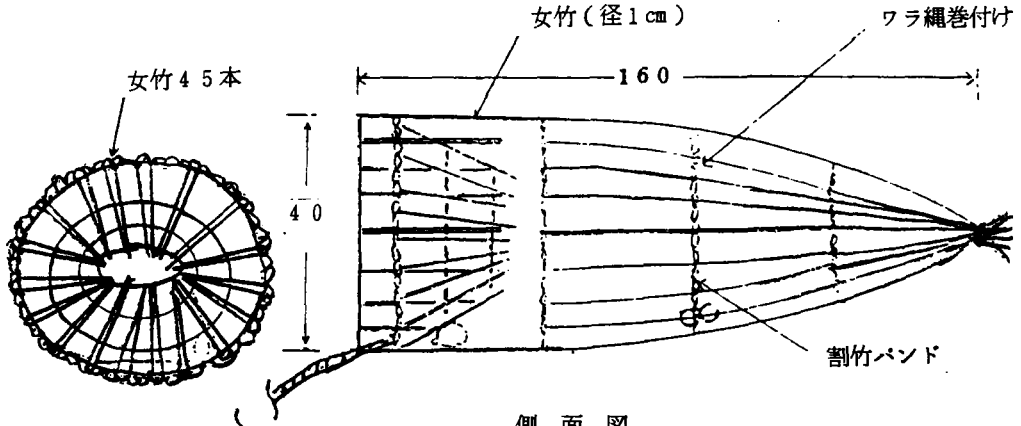
外　網



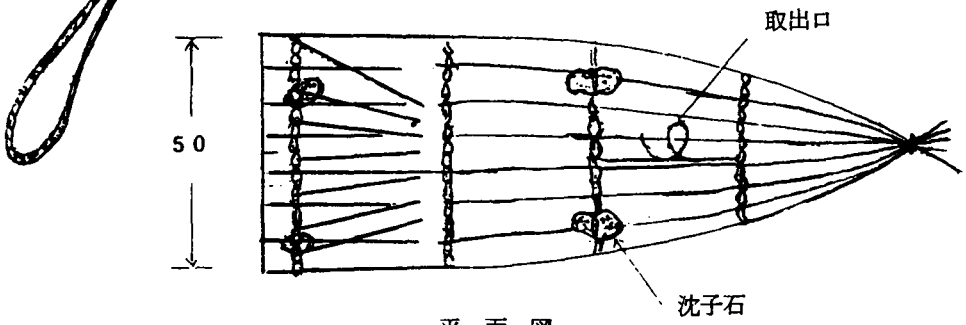
底　網



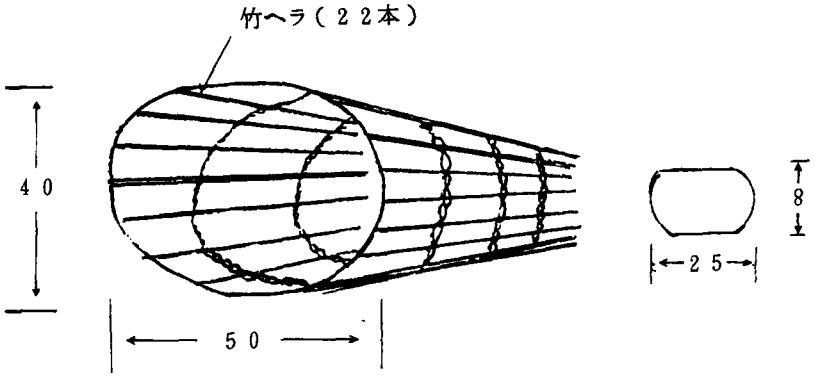
漏斗網



側　面　図



平　面　図



竹製こういか籠（Ｓ　５０　頃まで）

ずべりつり（素潜り釣漁業）

1. 調　査　地　：　川辺郡笠沙町片浦（野間池漁協　　森　　猛）

2. 沿　　革

時期は不明であるが明治頃，出水のタン（名前？）が来て，素もぐりで魚をひっかける方法を教えたと言われている。当時，森七熊氏等がすべい釣を行い現在まで継承されてきた。

昔は伝馬船で漁場に行き船上から石を投げ4～5人がもぐって魚を穴に追い込み，魚が口を開けたら，つり釣で引掛け漁獲した。

現在では森猛氏たちのグループが時化沖に出れない時などにやるだけである。これまでの最高は1日で100尾余りを漁獲したとのことである。

3. 漁　　法

漁場に着いたら，追手3～4名と掛手（森氏）を降し，船外機船を爆走させ漁場を2～3回廻り，魚を驚かせる。その後追手が潜り魚を穴に追込む。魚はほぼ決った穴に逃げ込むことから，掛手が潜り，穴に隠れた魚が口を開けたところを釣針で引掛け漁獲する。

4. 漁　　期　：　4月～7月　（盛期：4月～5月）

5. 漁　　場　：　野間池地先海底

(1)　水深：10m～15m

(2)　底質：岩　場

6. 漁船規模及び乗組員

1　トン

4名～5名

7. 餌　：　ー

8. 主な漁獲物　：　アラ，イシダイ，コショウダイ，ブダイ，クロダイ

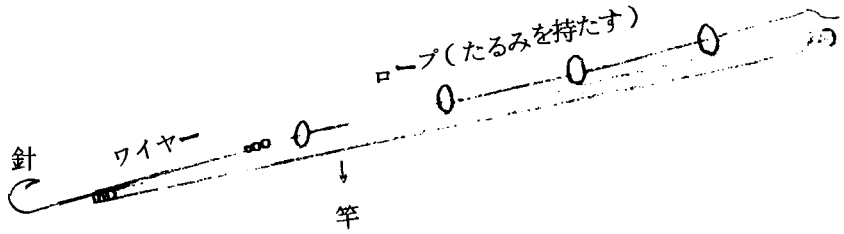
9. 漁獲物の処理　：　活魚

10. 漁具構成

	昔	現　　在
竿	竹2.5m	ファイバーグラス製の竿利用1.5～2m1本
針	針の大さを魚により変え3寸5分，5寸，7寸5分の3種類持ち，それぞれ竿に取付けていた。	針は魚種により大きさは変えるが，竿はそのままで，針先から取替えるだけである。

11. 漁具図または操業図

漁具図



操　業　図





突ん棒（オキサワラほこ突漁業）

1. 調　査　地　：　熊毛郡上屋久町宮之浦（上屋久町漁協　笠井久　みゆき丸）

2. 沿　　革

サワラ突は昭和１０年ごろから始まったと言われているが，その由来は不明である。昭和２０年前後には，１トン程度のサツマ型動力船やテンマ帆掛船２０隻程度が宮之浦近海，時に輝満曽根まで出かけ操業していた。宮之浦の他，楠川，永田にも操業船があったと言う。漁場選定はもっぱら山当てにより行い，漁具の構造は，餌木も含め今も昔の型を踏襲している。

現在では，宮之浦の５隻程が時期により操業しているのみである。

3. 漁　　法

(1)　操業時刻　　昼間（８時～１５時）

(2)　漁　　法　　流し

(3)　船と瀬の位置　　瀬の潮上

(4)　その他

山当てでムロアジのついている瀬の潮上で船を止める船首から餌木竿をふり，餌木が海面で８の字を書くように動かし，魚影が見えたら，餌木を立てるようにして泳がす。

サワラが餌木に寄ってきたところを胸鰭のうしろを目がけてモリを突く。魚体に刺さると，モリ先がぬけ，モリ縄が出ていく。魚が弱ったら縄を引いて取り揚げる。日によって，つく餌木が違うので，その日に合った餌木を使うのがコツであり，又，太陽を背にした方が魚影が見えやすい。

4. 漁　　期　：　７月～１２月　（盛期：１０月）

5. 漁　　場

(1)　水　深：４０ｍ～８０ｍ

(2)　底　質：天然礁

(3)　漁場の選定：山当て

6. 漁船規模及び乗組員

３トン～５トン

１　名

7. 餌　：　餌木

8. 主な漁獲物　：　オキサワラ

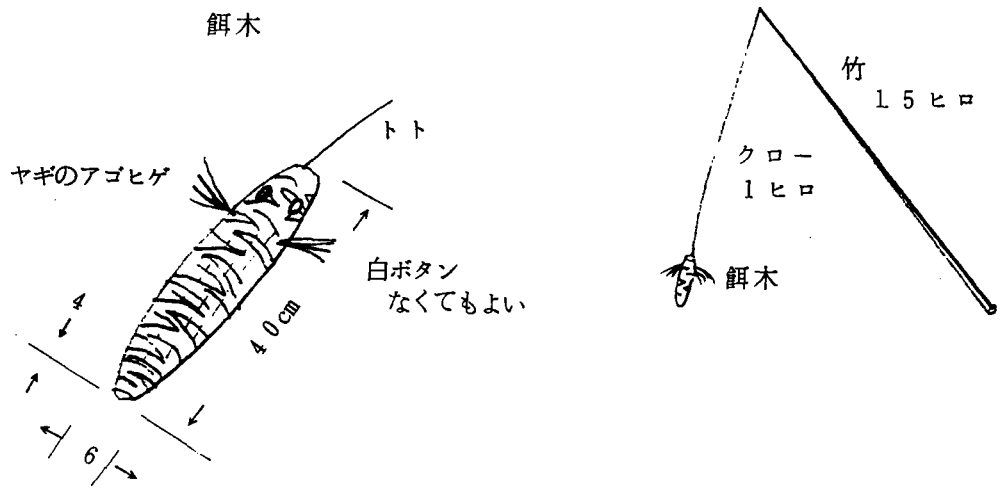
9. 漁獲物の処理　：　鮮魚

10. 漁具構成

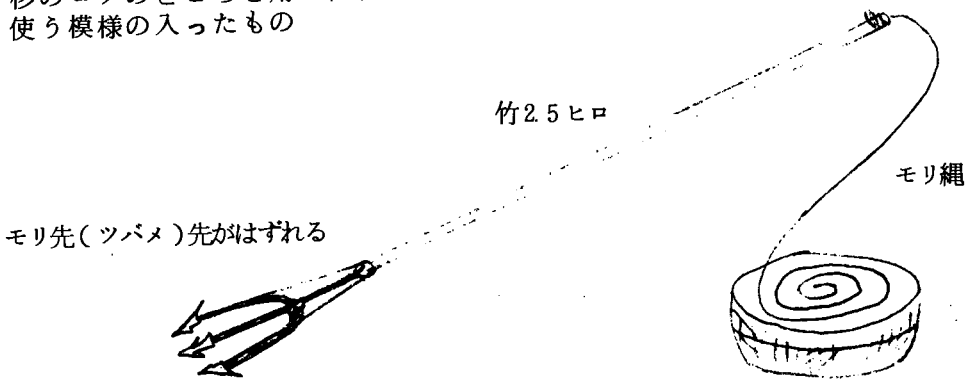
名　称	材　質	規格・寸法	数　量	備考
餌　木	杉	40×6×4	1	
餌木竿	竹	1.5ヒロ	1	
餌木糸	合成テグス	1ヒロ	1	
モ　リ	鋼	15×90	1	三又
モリ先	鋼	6×2	3	
モリ元	竹	2.5ヒロ	1	
モリ縄	クレモナ	220号　150m	1	

11. 漁具図または操業図

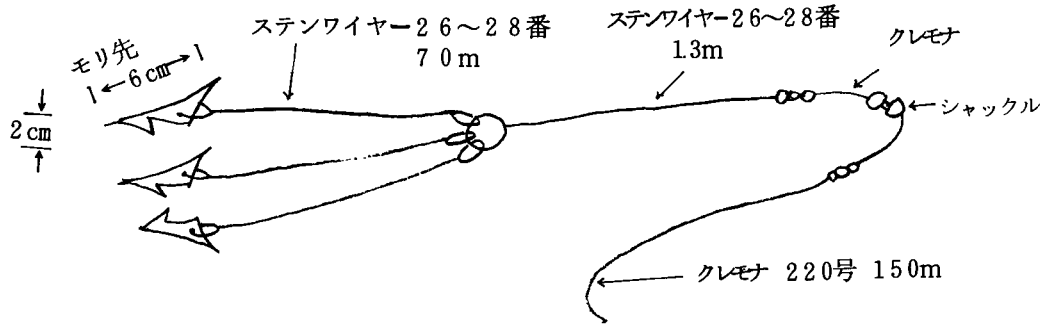
漁具図



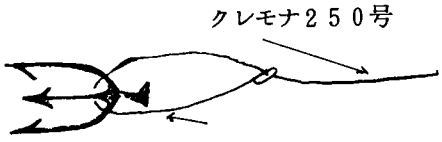
杉のコブのところを用い柾目に
使う模様の入ったもの



改良型

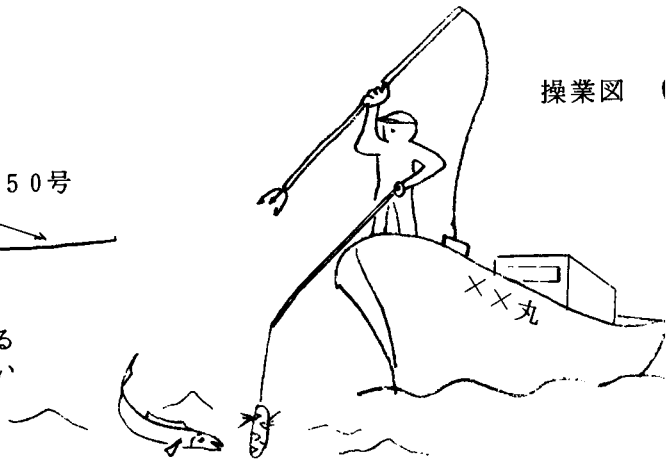


従　来　型



↑根元からはずれる
魚体が切れやすい

操業図



ソーラ突き（オキサワラほこ突漁業）

1. 調　査　地　：　大島郡住用村市（住用村漁協）

2. 沿　　革

この漁法は，文献によると高知県須崎市，宮崎県串間市都井，鹿児島県佐多町，十島村口之島，及び大島郡住用村に残っている伝統漁法である。

当地では，いつごろから始まった漁法であるかは不明であるが，およそ５０年前から多少の増減をくり返し，現在８人の漁業者が操業している。

3. 漁　　法

(1)　操業時刻　　朝まずめから

(2)　その他（操業方法）

日の出前に漁場（三瀬，和瀬，九瀬等の曽根）に到着し，まず始めにホロキビによりサワラ漁を行う。その後，日が出たら潮上から瀬上を船（サバニ）を流し，右手に銛，左手に餌木（餌木で駄目なときは袋を用いる）を吊るした竹ざおを持つ。餌木を左右・８の字に動かしサワラを水面におびきよせ，サワラのエラを狙い銛で一撃にする。

4. 漁　　期　：　４月～１０月　（盛期：４月～６月）

5. 漁　　場

(1)　水深：２０ｍ～１００ｍ

(2)　底質：　砂，岩礁

6. 漁船規模及び乗組員

0.８２　トン

１　名

7. 餌　：　擬似（餌木，魚体模型）

8. 主な漁獲物　：　サワラ（７*kg*前後が中心）

9. 漁獲物の処理　：　生でそのまま持ち帰り，地元で販売する。

10. 漁具構成

名　　称	材　　質	規格・寸法	数　量
餌　木（ヂチ）	ヤクスギ（晴天用），イヌマキ（晴天曇天用）牛の角・骨・山羊のヒゲ，貝等の 光沢部	３０～４０cm	２～３ヶ
魚体模型（袋）	綿布	１m	〃
銛（ソーラトギャー）	鉄 ユスの木の芯	長さ35cm,幅25cmの三又 ３m	１　本

※餌木は，この漁法の要になるもので，材料木はヤクスギやイヌマキ等の木目が複雑になっている部分を用いる。厚木を木目を見ながら紡錘形に削り，頭部には牛の角，尾部には牛の骨を用いる。さらに胸ビレは山羊のヒゲをつけ，目には夜光具を取り付ける。

餌木の他には，魚体模型（袋）を用いるが，これは，厚手の綿布をサワラに似せて袋状に縫い，水中のコイのぼりのようにする。この地域では，魚体模型は鹿児島から購入している。

11. 漁具図または操業図

○餌木（ヂチ）

